WASEDA bungaku FreePaper
vol.024_2011_fall
わからん?! 文学
Wonderful BUNGAKU

古川日出男＋重松清
雅雲すくね
中島京子→ドストエフスキー（訳：森鷗外）
斎藤美奈子
玉川重機
米光一成＋ナカシマカズユキ
望月旬々
青木淳悟
円城塔
八代嘉美
エイドリアン・ラッシュモア＝デイヴィス
朝吹真理子

古川日出男＋重松清
牛のように、馬のように

――「始まりの言葉」としての『馬たちよ、それでも光は無垢で』をめぐって、
そして「始まりの場所」としての福島／日本をめぐって。

当事者も、当事者でない人も

重松 今日、ぜひおうかがいしたかったのは、古川さんがご実家のある福島を震災後に訪れて書かれた作品『馬たちよ、それでも光は無垢で』の、「帰り道」です。ぼくはルポルタージュの取材でする旅が多いんですが、取材先に向かうときの道すがらでは、逡巡や困惑、あるいは期待や目論見が頭のなかを巡りつづける。それが取材によって「事実」や「情報」、あるいは「物語」や「因果」という落ち着き先を得るわけです。でも、ぼくたちライターは現場から戻らなければならない。取材から記事の執筆へとモードを変えるわけです。そういう意味での「帰り道」は、いつも独特の状態にあるんです。現地で見聞きしたことに浸っていたい気持ちと高揚感と、どこかでどんどん仕事に戻っていく感じ。混沌としたものを整理しながら、でも整理しすぎないようにブレーキをかけつつ、仕事場に帰ったらすぐに原稿にとりかかれる

¥0

ように準備する、あの時間はほんとうに独特なんです。だから、古川さんたち一行の、描かれなかった帰り道がどんなだったろうと知りたかったんですよ。

古川　書きはじめからほとんど選択肢がない書きかたをしていたというか、この話は小説にふつうある「こうなればいい」「ああなればいい」とかがなかったんです。「ここでどう展開させようか」も、登場人物の出し入れも。そもそも語り手が消えるわけにもいかないですよね。だから、エンディングで語り手が消えたのはびっくりしました。だから、「描かれなかった帰り道」は、作品のなかにはないんです。

　実際の帰り道は、四人で車のなかにいて、ただ「長いなあ」と。印象的だったのは、高速に乗るときに「避難のかたですか？」って訊かれたことで、牛一郎がいないバージョンのエンディングに書けるのは、その一言かもしれませんね。ただ、それはまったく考えていなかった。どこで終わるかわからなかったし、何が起き、何が取材対象で観察対象なのかもわからないままだった……ただ、いま思うと「場所から観察されている感じ」は強かったですね。タイトルにも入った「光」のイメージです。光に上から周りから見られている感じで、それがほんとに意外だった。その意外さこそがこの作品を押し進めていったし、そこからズレようとすると戒めの声が聞こえてくる感じでした。

重松　福島に行く前に「お前は見るべきだ」「来るべきだ」という声に導かれますよね。その後「お前はここに残るべきだ」って声はありませんでしたか？

古川　出発する前、いろいろなことを考えました。福島の父母を引き受けるとかはもちろんありましたけれど、政府が放射能の影響を科学的に考えないで意味なく全員退去をさせるならそこに自分が住めばいいんじゃないか、と考えました。移住し、そこで発信する。ただ、それってヒロイックなんですよ。そんなことをして誰が救われるんだろう、と。もともといる人が発信するのはいいと思うんです。でも、わざわざ被災地に足を運んでやることとかといったら、それは違う。では何をしたら、ナルシシズムやヒロイズムから離れてものを見て、言葉を届けて作品にまでできるのか……どうしたら「小説を書いていい」と自分に対して認められるのかが難しかった。

　ふつうに考えたら、この話でいちばん異様なのは、ぼくが実家に寄ってないところじゃないかと思います。もちろん、取材からしばらくたったあとでは、行きました。半壊認定されていた実家の家屋は見たときに愕然とするぐらい酷かったけれど、家族はなんとか立派に生きていた。でも仕事が専業農家なので……もし書く前に見ていたら、そうしたことを書いたと思うんですよ。でも、自分が一人称の「被災者の物語」を入れてはいけないという覚悟はずっとあったので、終わるまで行けなかった。もちろんその間もずっと連絡をとって、あんなに実家とまめに連絡をとりあったのは初めてですけれど、それでも「一人称」を入れないことでしか、あそこで起きたことを人に届けてよいという自分への許可ができなかったんです。

重松　この作品で「私」に特権があるとすれば、「小説家であること」だけなんですよね。被災地の出身であるとか、身内が被災したといったことは、一切特権にするまいという態度が貫かれている。

古川　書かないのもおかしいからデータとしては入れるけれど、そこには寄りかかるまい、と。そうしているときの軋みは自分で読むと「本当は叫んでるな、それをなんとか押さえ込んでるな」ってわかるんです。でも、わかるということは、そこまで誠実に封印できたことだろう、推敲しただけの意味はあったんだ、と思いました。それで、あのエンディングの五、六枚を書いたとき、すべてはスチールのように止まった……。

重松　「私」すらいない場所ですよね。

古川　それができたことが大きかったですね。多くの言説が「当事者か当事者でないか」という問題一色になっているとき、「当事者」も「当事者でない人」もいない場面を描くことができた。震災のあとに起きた現実を慰撫するようなものを、物語＝想像力でやりたいと願って、やれると思わなかったですけれど、「やれたかも。いや、やれた」という感じがしたのはうれしかったです。

重松　前半で、宮沢賢治について書かれた梅原猛さんの言葉を引用していますよね。「小説は、やはり人間中心の物語」であり、対して宮沢賢治は「人間だけが世界において特別な権利をもっているとは考えない。鳥や草や木、獣や山や川にいたるまで、すべてが人間と同じように永遠の生命をもっている」と考えている、と。『馬たちよ』は小説だけれども最後には人間中心ではなくなるわけで、それが梅原さんの言葉に対する回答にもなっているのではないですか。

古川　原発事故のことが大きいと思うんですが、震災がただの自然災害ではなくて「人災」でもあったということは、「人間が、人間以外のものを巻き込んでしまった」ことだと思うんです。それを写すとき、人間が人間を書いたところで、外側に立つことはできない。動物たちの目線や、動物たちに届ける言葉でない限り、われわれ自身を大きく捉えることはできないのではないか――そういう気持ちはありました。それが、二種類の動物しかいないエンディングに向かわせたのかもしれません。

重松　原発を挟んでどちらに立つかではなく、等しく罪悪感があり、等しく許されている感もある、そういうところに立とうとしている気がします。

古川　一旦書いたけれど削ったものはあります。「なんで唯一の被爆国が原発先進国になったんだ」と、いちどは書いたんですよ。でも、それだと「誰が悪い」とか「自分らが悪い」ということになってしまう。それを否定はしないけれど、自分のなかで咀嚼できないまま出しちゃうことはすごく怖いし、そこを話している限りは辿り着けない場所があるのもわかる。

重松　そこでは「語らない」という選択肢も当然考えられたと思うけれど、古川さんはその選択肢を認めながらも、でも語る側を選んだ。

古川　語らない選択肢は当然ありました。「一人称」に戻って実家に行って手伝えばいい。でも、書くことで同じぐらい物理的に貢献するところまで行けないだろうか、と。しかし、自分のやりかたを崩さずにそれをやることが、なにを意味するのか――苦しかったのは、いままでやってきたことが間違いだったと気づかされたことで、「あの作品も間違っていた、これも間違っていた、お前のこの数年間ほとんど駄目だ」と自分を検証しながら否定していく過程はきつかったです。

重松　否定したあと、『馬たちよ』を書いて救えました？

古川　いや、過ちは過ちとしても、救えない部分もあります。わかりやすく現象面だけを辿っても、震災前から書いてる作品が三つあったけれど、ひとつはもう駄目になりました。もう書けない、だから最終回にする。しかも最後に、ぜんぜん関係ないのに福島の話をして終わろうとしている。もう一個は、書けなくなるとは思わなかった作品だけれど、それすら突っかかってしまった。でも、本になるのは二年後になるかもしれない長いものだから、震災から二年経った人々が読みたいものに変えられるんじゃないか、そこに必死に縋っています。もう一作は現代を舞台にしていて、そのぶんむしろ逆にこのままいけるかもしれないけれど……。

重松　震災も取り込んじゃって。

古川　そう、消化していけるかもしれない。でも、いまもう通じない作品があり、二年後に出しても通じない部分が見えたとき、「お前がやっていたことは、地震が来たら崩れる程度のことだったんだよ」と認めざるを得なかった。単純に、エゴのために書いていたものがあるとわかったんです。「自分はすごいんだ」と人に言わせたかった、そういうものを書いていたんじゃないか。そのことにガッカリしました。

重松　そこまで言うのは、自分に厳しすぎる感じもしますけれど……あれらの作品はぜんぶエゴで

63年生。『ポニーテール』、『十字架』（第四四回吉川英治文学賞）ほか。

すか？

古川 わからないです、ほんとうのところは。ただ、そのことについてはいまも考えます。周囲では、だんだん震災や被災の空気がなくなって、復旧に向かっていると思うんです。でも、自分のなかでは進行形のまま、小説家として小説に対して内部被曝している。これを認めていくしかないと思っています。

時間が壊れた

重松 「三・一一」というのは、たしかに地震が起きて津波が来た日付です。でも、いまやそれらは日付を離れた現在進行形ですよね。

古川 だって漏れつづけているし。

重松 その「日付が混乱していること」が、作品にとっては、じつは大きな意味があると思うんです。日付が失われた状況に定点観測的に日付を打ち込んでいくことがルポルタージュであり、日付をより無化していくのが小説である、という点で。

古川 小説は、どこかで永遠に読まれることを欲望するものだと思うんです。消費されるものではない、という。時間に対するその意識が、ルポのように日付を楔として打ち込むのではない仕方を選ぶんでしょうね。『馬たちよ』にとっても、それはかかわっていると思います。

重松 ルポルタージュは、「震災から何ヶ月」「百日目」とか、どんどん変わる日付によって、描く風景もどんどん変えていきます。そのことは、地震や津波の被災地にとっては、意味がある。復興が進み、仮設住宅が建ち……と、観察日記のような日付が必要なんです。でも原発に関しては、百日目と二百日目でどう変わるかが見えない。つまり、ルポができないんですよね。そこで行使できるのは想像力であり、さっきの古川さんの言いかたを借りれば「光を見るか、見ないか」になってくると思う。

古川 たしかに、地震や津波は時間を壊さなくて書けますよね。

重松 そのぶん、再生の物語もつくりやすい。「何日目でこれが生まれて、これが戻った」と。『馬たちよ』の作中に出てきた水族館の「アクアマリンふくしま」でも、いまは魚が戻ってきましたよね。でも、原発事故という意味では、福島という土地に日付が戻ってくるのは、数十年後かもしれない。その意味で、作品の描きかたも、何通りもある気はするんですが、古川さんは『馬たちよ』で被災地に立つことを全うしましたか。それとも別のかたちで被災地との向き合いかたがはじまりますか。

古川 後者だと思います。それが「小説家として」なのかはわからない。ただ、次は「一人称」だろうとは思います。つまり、いまぼくは福島に戻ると――こんな感情を口にしていいのか――「福島、美しい」と思うんです。次にやるとしたら、そういうことでいいんじゃないか。自分のいままでを完全否定しつつ転向しないで書くために、まず最初に「二人称」としての『馬たちよ』をやったから、このあとはもっと本当に個人的なことを、と。作品でも言及した、出身の小学校の校庭に、先週行ったんですが、剝き出しの削り取った表土が山になっていて、ビニールシートもかけられていなかったんです。それに近寄って「ああ、こういうことか」と思う――そのことを語ってもいいんだろうな、と。震災直後にみんながかかわったやりかたを、これからは、やってもいい気がする。

重松 それは、いちど違うやりかたをできたからですか。

古川 それもあるけれど、福島以外は復興がはじまって、あのかかわりかたをやめていくと思うんですよ。でも、福島はそうじゃない。だからそのかかわりかたをしていくんだろう、という予感です。ルポと小説の話で重松さんが言われたように、福島の場合、壊されたのは「時間」でした。地震と津波は空間を壊したけれど、それは壊された物を埋めて、直せるんです。ちゃんと日付が再生の

古川
「時間が狂うことが空間そのものも歪めている」

重松
「そこに生まれるものはなんだろう」

日付になる。でも、時間を壊された世界はどうすればいいのか。ぼくは、そこにもういちど入っていくために、まず馬たちを見たような気がします。時間が壊れていることを全身で浴びて、作品にできるならこうやって作品にしてみて、そのあとで、再び壊れた体で入っていって、時間のない世界を肉や土や緑のあるものとして描くことになるんじゃないかと。

重松 いま古川さんが言われたことは、よくわかります。ぼくは三日前までウクライナで取材をしていたんですが、チェルノブイリの三〇キロ圏内では何カ所も検問があるんですが、検問を越えても越えても風景が変わっていかない。

チェルノブイリに行く前は、ずっと津波の被災地を回っていました。津波を受けたところは、カーブを曲がったら瓦礫が目の前に広がっている、その風景の変わり具合に絶句していたんです。ところが、チェルノブイリでは風景が変わらないことに絶句した。風景が変わらないと、時間の感覚がなくなるんですね。時間が進んでいないような気がする。

しかもウクライナなんかはまだ、放射線の影響を単純な同心円でやっている。「二〇キロ圏内」とかね。でも、たぶんホットスポットがいっぱいあるはずです。そうなると今度は、コンパスで測る距離感もなくなる。

古川 なくなりますね。時間が狂うことが空間そのものも歪めている。

重松 そこに生まれるものはなんだろう、と思うんです。そこに住み着く人もいるかもしれない。チェルノブイリにイノシシがたくさんいたんです。動物は他にもいっぱいいた。プリピャチという町は、ぼくが見てきた資料では本当にゴーストタウンだったんだけれど、二五年経つと並木が建物を越えて覆っていて、建物の屋上から町全体を見ると、不謹慎な言いかただけれど、森のなかにリゾートマンションが点在しているような、そんな感じだった。そこから、「ああ、人間の痕跡がなくなって二五年なんだね」とわかる。でも、それは五年や一〇年ではわからない。もっと言うと、セシウムの半減期のスパンは半端じゃないから、短いスパンでは描きようがない。

いまはどのメディアでも震災ものや原発ものは必要とされているから、人は次々に取材に行くし、記事が書かれる。でも一〇年後、二〇年後は……。

古川 なくなりますね。一〇年も保たないと思いますね。

重松 少なくとも一〇年が経つと、津波の被災地は「これだけよくなりました」と示せますよね。でも、原発の被災地は、時間の失われたままの一〇年になるでしょう。そのとき、時間や空間の感覚が失われたものをルポルタージュが書くのは、とても難しい。それこそが、さっき古川さんの言われた「想像力」の果たすべき役割なんだと思います。それをいち早く古川さんがやった感じがする。

古川 時間も狂って、空間でもコンパス的なものが狂っていく場所というのは、よく言えば、原初の状態、宇宙がこれから生まれるような状態としてあるんでしょうね。その土地を、「終わっていく場所」じゃなく、神話的な「始まりの場所」として捉えなおすことが大事になってくると思うんですよ。

いまは悲劇が起きたばかりだから、悲劇を言うことが必要だと思うんです。でも一〇年、一五年経ったとき、悲劇を言いつづける報道はたぶんなくなるんですよ。あまりにも悲劇を言いすぎると、かえってみな触れたくなくなってしまう。拉致問題とかがおそらくそういう構図なんだけれど、それと同じことがおそらく福島にも起きる。それをどうやって、「こんなに酷い」ではなく、「見てみればわかるように、きれいなだけだよ」と言うか。『馬たちよ』でぼくは「美しい」と書いているけれど、まだなにかがズレている。そこが言葉として届くところに行かない限り、あの場所の一〇年、一五年を同時代に届けることはできないんでしょうね。

重松 タイトルにもある「無垢」という言葉は、悲しい言葉でもあると思います。それは、誕生の美しさに含まれていると同時に、死にも含まれている。じつはそれ、ノンフィクションではなかなか難しいんじゃないかと思うんです。調査報道などは特に、「無垢」を受け容れてしまったら取材が終わってしまう。一見「無垢」を装っているものの化けの皮を剝ぐのがノンフィクションの一つの醍醐味ですが、だからこそ逆に「無垢」を無垢のまま、いわば「無垢なる無垢」を描くのは難しいと思うんです。

古川 ノンフィクションの論理として無理なんでしょうね。

重松 そう。だから、『馬たちよ』のようなかたちで無垢なるものを、生と死が同じになっていることを描くのは、やっぱり小説の力だと思いました。とくに、最後の一行で「自分」が戻ってくるかたちがね。

古川 あそこでやっと、言葉を出せたんですよね。

重松 ここで終わりはじまる、という——まさに死と生の一体感。

古川 どう終るのかはわからなかったし、最後になって「自分」が語ることに戻ってくることもわからなかったし、そのフレーズも用意していなくて、ほんとうにあそこで初めて出てきた言葉なんです。もともとこの作品はタイトルが先にありました。福島に行って見たその日のうちにじっと考えて出来た作品で、あそこで見たことを十数文字ぐらいでまとめるとしたらこれしかない、そう感じたところからスタートした。そのことだけが、あのエンディングの言葉を語らせてもらえる何かにつながった気がしますね。

バイブル、ビンラディン、新婚ホヤホヤ、椎茸農家とベストセラー…をめぐって広がるこの対談の続きは、発売中の「早稲田文学④」に掲載！ 対談後、研ぎ澄まされたふたりが挑む書き下ろし作品も必読!!
詳しくは、本誌15頁の広告をご覧ください。

蛸親爺（1）

雅雲すくね

居酒屋の前の往来、路のまんなかで蛸が酔っている。

「たーこたーこ、たーこたーこ」と地面を手で叩いて拍子をつけながら、蛸が声高に唄う。

花風の吹く夕、往来に面して油染みた暖簾を出す居酒屋の、店先にはビールケースが積まれ、立て看板、一升壜、牡蠣殻が並ぶ。朱塗りの行燈の明りの先に、蛸が八本ある足をだらりと伸ばし、腹を兼ねた頭を横様に倒しながら、墨吐き口を突き出して唄っている。

唄う合間に、「ういーっ」と一つ吐く。また唄う。それを繰り返す。行き交う人々は、『あれは何だ』という様な眼で見ている。

青年が一人、なだらかな肩をまっすぐに起こしつつ、電気屋、乾物屋、鳥肉屋と並び、居酒屋に続く商店街を歩いて来た。下へ向けた視線の先には蛸が酔っている。

「おっ、そこの兄さん。どうだい景気は」と蛸はねめすえた。

「いや、まあ」と青年は細面に呆れた顔付を見せて、足をとめた。

「いや、まあ。か。いいねえ。いや、まあ。まったく、世のなか、何事も『いや、まあ』くらいがちょうどいいってもんだ」

「そうですね。それでは」と青年は素っ気なく相槌を打って立ち去ろうとする。

「おっ、どこか用でもあるのかい」

蛸が這いずって引きとめた。

「別に、家に帰るところです」

「おお、そうかい。そりゃ奇遇だ。おれもこれから家に帰るところよ」

「そうですか。では」と話を切ろうとする青年の足下に蛸が滑り寄った。

「いやいやいや、ちょっと待ちなって。どうせなら一緒に帰ろうじゃないの。兄さん、あれだろ。小川さんところの子だろ」

「え、ええ」と青年はたじろぐ。

「だろ。おれはあれだよ。山本。知ってるでしょ。向う横丁の」

「ええ、一応」

「おれは山本の所で間借りしてんだ。と言っても壺だけどな。アッハッハ」

青年が歩き出して、蛸も並んでついて行く。地を這う大柄なヒトデの様である。

「いやあ。今日は昼間っから飲んだ、飲んだ。日の暮れねえうちの酒はこたえられねえな。コマーシャルでやってる様な酒は大抵だめだが、明るいうちから飲みゃ甘露だな。見てよ。顔真っ赤でしょ。茹でなくても赤くなっちゃった。アッハッハ。腰も抜けてます。でも肩は借りません。蛸だから」

蛸は足をしならせて、からからと笑い、青年へ顔を向けると別の話へ飛ぶ。

「しっかし、あの、暗渠の流れの角のマンション建設もどうなるのかね。ずうっと空き地のまんまだよ。この辺の者は残らず反対しているし、一昨日通りかかったら、建設許可証が外れていたけどね。諦めるのかね」

「あそこは、景観に気を配りながら通りより引っこめて、緩やかな段々畑のようなマンションに設計し直しているらしいですよ。壁も淡いクリーム色にするとかで」と青年は答えた。

「へえ、そうなの。しかし、皆景観保全とか言っちゃって、あのマンションの辻向いのアパート見ろ。壁なんか、どピンクだよ。それが塀もなくて。その隣は玉子色に塗っちゃった家とかが、往来いっぱいにまで迫り出して、それがまた赤だ緑だっつうのぼり立てて景観守れってやってんだから、どっちがどっちだか、わかりゃあしないよ。そう思わない」

「え、ええ、そうですね」

「その点、小川さん家は立派だ。今でも生垣を結いめぐらせている。いいねえ。うちの隣の毛糸屋なんか、家ごと立て直すってんで、どうするのかと思ったら、マッチ箱みたいな三階建てで。まあ、手ぶらで挨拶に来るくれえだから、ろくなもんは建てねえだろうと思ってたけどよ。せっかくの地面もコンクリートで塞いじゃって。生垣はもちろん、塀もなし。門もなし。そのくせ、いっちょまえに車止める所は拵えてよ。この間なんか、路を渡ったとっつきで、いきなり警笛鳴らしやがって、まるで犬猫扱いよ。しかし毛糸屋って、そんなに儲かるのかね」と青年に向く。

「毛糸を仕入れて並べておくだけですから」

「毛糸屋を閉めた際は、老夫婦、これで御隠居だ。ご苦労様でした。あとは、長年暮らした家でごゆっくりって思っていたら、普請って話だ。他に儲け口を持っていたのかもな。住宅メーカーの若い営業の他に、上役みたいなのがついて来たから。一括で払ったんだよ。でもあれだな、やっぱりいくら立派に築いても、門がねえと締まらねえな、家は。見た有様は蔵か櫓だな。うちの素人下宿なんかでもよ、門開けてそのまま一歩も入らずに玄関の戸を引けるからね。それほど狭くったって、やっぱり門があるといいわな。帰ってきたって感じがあるはずよ」

「そうですねえ。門があった方が出入り（でいり）が気楽でしょうね」

「ありゃ、一つ間があるんだな。玄関の出端に往来じゃ、そわそわしちまうんだよ。自分の身が内から外へ出んとするのに、つかの間でもあると違うんだよ。それが庭なり、アパートの廊下でもいいわな。そういう、内と外の間があれば神経が楽なんだ。帰りも同じことよ。往来からいきなり家だと、外の気が入り込んで来る様で落ち着かないんだな。と、そういえば、小川さんのご主人最近遅いんだって」と蛸の口から洩れる話の流れはまた変る。

「ええ、残業が多いようで」

「本当に。コレなんじゃないの」と蛸は小指のつもりで足の先を一本立てた。

「そんな甲斐性ないか。アッハッハ。いや、これは失敬。でも、体はいたわった方がいいよ。今、歳は関係ないから」
「おじさんも、気をつけて下さい」と青年も気を遣った。
「おじさんか。へへっ。そうなんだよ。おれはこう見えておじさんなんだ。この間までは、背広を着て会社に通っていたのになあ。どうしてこうなったか。我が身ながら見当がつかねえ。蛸になっちゃ、人の見方が違うからねえ。この間なんて、家賃入れるの怠ったら山本のかみさん、大家だな。それが帰ったら蛸壺がおっぽり出されてたんだ。往来に。驚いたね。慌てて拾って家に入ったら、『月末(つきずえ)までに、三万。きちん、きちん、と入れてもらわないと困りますやね』とかぬかすんだ。いくら家賃を納めねえからって、いきなり蛸壺を放り出すこたあねえじゃねえか」
「下宿住まいもつらそうですね」
「おう。おれが晩飯食ってる傍から掃除機かけやがるからな。おれの行く所、出る所ばかり掃きやがる」
そこに黒い犬を先にして、ジャージ姿の男と女が歩いて来た。鎖をつけていない。男の飼い主がゴム毬を投げた。電柱の手前で止まったところに犬がかけ寄った。ボールを行き過ぎ、夢中で電柱の臭いをかぐ。ゴム毬は飼い主が拾った。
青年は犬連れが行き過ぎるまで、とどまっていた。
青年は目を蛸に移し、
「おじさんは、どうして蛸になったんですか」と問うた。
「それよ。おれもさっぱりわからねえんだが、あれは蒸し暑い日で、ホームで電車を待つ間にのぼせ上りそうなほどだった。会社もひけて、甲武線に乗っていたんだ。妙に電車が揺れる日で、進んだり止ったり、下手ッくそな運転だな、と思っていたら、駅の手前で滞っちまって、五分も十分も動かねえのよ。ホームはそこなんだからよ。降ろして歩かせろ、って言いかけたら動き出して、そしたらまた、『キキィーッ』っとレールの軋む音が耳をつんざいたんだ。頭がぐわあんとなった。たまらず目を瞑ったら腰が抜けちまってて、床に滑り落ちていてな。今度はけしきが虚ろなんだ。途端にみんなぐるぐる回り出して、ひっくり返ったかと思った。
まわりは靴ばかり見えた。慌てたね。とにかく動こうとしたら、床に足が投げ出される感じで。目の前に蛸の足が見えるんだよ。常に三、四本。手はどうした、手は。と思って手を動かそうとしても、やっぱり足が動いちまう。三、四本がうねうねと。あっとたまげて、これは蛸になっちまったんだな。おれは思ったね。
何しろラッシュアワーだ。考える間もなく人が押し寄せて、とにかく電車の外に出たよ。出たはいいが、さて、どうしよう。駅を出てよ。硬い地面の上を歩いたね。これが痛いんだ。歩くうちにするすると行けるようになったがな。はじめのうちは慣れねえから、足をぶん投げる様に歩いたわ。松の廊下を行く大名の如きだな。公園まで来て、少し落ち着くかと思ってベンチに行ったら、植え込みに猫がいた。葉っぱを食っててな。『あっ猫だ』と思ったら、猫も気がついて、こっち見たからさ、話しかけてみたよ。何しろこっちは蛸だ。猫にだって話が通るかもしれないってね。『こんばんは』って挨拶してみた。そしたら、猫は身を震わせて、目を丸くしているんだ。おれは通じたのかと思って、手を挙げて近づいたら飛び跳ねて、逃げて行っちまった。
その後は、浄水場までたどり着いて。表は車や自転車で険呑だから、路地へ入った。角を折れると一本道だ。浄水場の板塀を右に離れれば、神社の森だ。くろぐろとした道が伸びた片側には、鳥居や石灯籠や、杉の木立がただの黒い物となって並んでいる。化け物屋敷の廊下を行く様な心持だ。鳥がまとめて十羽ほど、森から飛び立った時は一度こらえたが、出し抜けに犬が吠えた時にゃ、肝を抜かれて腰が抜けかけたわ。腰は無かったんだけどな。へへっ。それでびっくりした拍子に板塀の破れ目から浄水場入りこめちまって、足一本入る程度の隙間だったが、骨も殻もねえ軟体動物にゃわけねえさ。
入りこんだ所にあったのが貯水池よ。妙なものでやっぱり蛸なんだなあ。水を前にしたら、体が誘われる様で。身を躍らせて貯水池へ飛び込んだ。いや、習慣てのは無益なことをさせると思ったよ。何をしたと思う。息を止めたんだよ。これが。もちろん、ぜんぜん苦しかないんだよ。足を八方に広げてな。落下傘のていでふわりふわりと底まで下りて。月の光が射し込んで、水の底が蒼く漂っててさ。体は自在さ。するすると底を這って、あちらこちらに行ったり来たり。飽きたら、吸盤と吸盤を合わせたり離したりして。
ふと、腹が減ったな、蛸は何食うのかと思ったけれども、なんでも食えそうだ。まあいいや、戻ろう。と水の上に顔を出すと、壁が遙かに上まで続いている。今こそ、この吸盤が役に立つだろう。たやすいこった。吸盤つけときゃ落ちやしないからな。まずは吸盤をくっつけてさ、二本目も投げる様に、ぺたって、貼りつけて力を入れ、体を引き上げようとした途端に水に落ちたのよ。吸盤ってのは妙なもんでさ。力を入れなくとも吸いつくのよ。ところが、力を入れても吸いつく力が強くなるわけじゃないんだな。焦ったねえ。重ねてやっても同じことよ。壁のコーティング剤が相性悪いのか、吸盤にぴたりとこねえのよ。上るのは止して、水底へ潜ってさ。手立てはないかと思いめぐらせて。水の上に顔を出してみれば、コンクリートの壁が聳えていて、区切られた夜空があるだけ」
「満月って言いましたっけ」と青年はしるこ屋の角を曲がる。
「そう言ったっけか。何にせよ、物陰でもあれば落ち着けるんだが。もちろん生きた物なんていないし。と思った矢先に何かが動いて、来るんだ。太いのが来るな、と見れば歯の鋭いうつぼよ。なんでうつぼが来るのよ。飼われていた奴だ。頸に革紐が巻いてあったからな」
「どうしてうつぼが貯水槽に入り込んだんでしょうか」
「さあな、どこかの奴が、浄水場に放り入れたんじゃねえか。とにかく、うつぼだ。大きく口開けて、のたくりながら近づいて来る。うつぼにゃ勝てねえ。うつぼがおれを食いに来たさ。おれを食うのかって聞いたら、『くう。』って言ったからね。口開けて『くう。』って頷いたわ。丸い目をして。
おれがうつぼに食われる。その寸前に、『どぼん』って何かが降って来たのよ。それが甲冑の如き伊勢エビでさ」
「おじさん、それは実際の話ですか」
「そうよ。ここにいるおれが蛸なら、ありゃ夢じゃねえ」
「航空便から落ちてきたんですかね」と青年は考察した。
「どうだかな。丈夫な伊勢エビだ。それがうつぼの前に立ち

はだかった。泳いでな。どうも、うつぼの奴は伊勢エビがいけすかねえらしいのよ。斜に構えて伊勢エビの方をチラチラ見ていたからね。おれはおれで、だんだん伊勢エビを食いたくなってな。

　それで三竦みよ。おれが伊勢エビを食ったら、おれがうつぼに食われる。伊勢エビがうつぼを倒したら、おれが伊勢エビを食うだろうな。うつぼが動いておれを食っちまったら、どうもうつぼはいやだろうな。伊勢エビと二人きりで。ストレスたまりそうだ。うつぼの奴、おれに近づきながら神経は伊勢エビに向いていたからね」

「伊勢エビは、うつぼの視線が気にならないんですかね」

「時折、跳ねていたな。うつぼはその度に引き返して行く。それでよ、いい加減、ぢっとしてても仕方がねえ。おれがまず、うつぼに踊りかかった。うつぼは壁や底に当たると引き返す癖があるらしくてな。その隙に乗っかって。いや、勝てると思っちゃいなかったが、こっちは蛸でも頭は人間だ。うつぼ如きになめられてたまるかって気を奮わせて。それに伊勢エビの奴も助太刀をしてくれるだろうと当てこんでいたから。そうしたら、伊勢エビの奴、どっかに行きやがった。おれが食われたら自分の天下だと思っていやがるのか。おれだって気を遣ってやったのよ。

　うつぼは強え強え。蛸の力じゃどうにも太刀打ちできねえ。革紐で締めつけてやろうと思ったんだが、頭から抜けちまった。うつぼの目が光ったと思ったら、振り落とされた。伊勢エビを具足煮にして食っとくべきだったと観念した間際、地の割れる様な音がし出して、地面が引き抜かれた気がした。行き着いた先が暗くてな。見通しが利かねえ。ふと、何かにしがみつきたくなってさ。水のなかでやたらめったら足をうねらせた。出口の知れねえ貯水池で頭が痺れてきて、しまいに墨でも吐いてみたが、何にもならない」

　蛸は俯いて、青年に後頭部を見せながら、胴震いを一つした。

「それがな、正気に返ったら蒲団で寝ているんだ。何だ夢か。やっぱりあれだな。昼に弁当食った後で、割り箸を折らずに捨てたのが間違いだった」

「そのお呪い、民俗学の授業で習いましたよ」

「そういうところから隙が出るのよ。おかげで狐か狸に化かされちまったな。恐ろしい夢だったって、蒲団を摑んだら、手が蛸なのよ」と蛸は足の一本を挙げてくねらせた。

「それで起きたはいいが頭が働かねえ。廊下を行く音がしたなと思ったら、女房が来て、おれを見るなり、短く叫んで廊下に下がったと思ったら、箒と塵取りを手にして出て来た。『何だ』と言う間もなく、おれを塵取りと箒で挟みつけて、そのまま塵取りごと、庭の焼却炉に叩き込みやがった。すぐに煙突から這い上がって。女房の奴は家に入っちまったか、だめだこりゃ。当分話にならねえって、出たわ」

　蛸と青年は、一軒の家の前で立ち止まった。

「おじさんの家はここですよね」

　青年の言った先には、勝手口の様な門構えの家がある。細い門柱には御影石を刻んで『山本』と印して、下に『貸間アリ〼』の札が下がる。めぐらされた板塀の隙間に顔を出した岩蓮華は、たそがれに色を失ったまま動かない。

「おう、そうだな。じゃまたな。今度遊びに来てくれよ」

「はい、さようなら」

　青年は会釈して去った。

　めぐらされた板塀を押し退けんばかりに家が建つために、塀と壁の間は、帯ほどの地面があるばかり。門と玄関の間は蛸の頭ほどもない。一歩入って門を閉めれば蛸の頭がつっかえる。

　蛸は往来に立ったまま門を開け、玄関の戸を開け、敷居を二つながら跨いで門を閉め、玄関の戸を引いた。

　家の内からは、「あーあ」という山本のおかみの溜息が、外では街燈が明滅して夜になった。

〈つづく〉

果たして蛸親爺は人間に戻れるのか!?　戻る気があるのか!?　さらなる混迷と脱力へと誘う第二話は、11月中旬に小誌サイトにて公開！　毎月、更新するかも（親爺次第）。www.bungaku.net/wasebun/

雅雲 すくね　Gaun Sukune

71年生。「不二山頂滞在記」で第21回早稲田文学新人賞受賞。骨抜きのユルさと奇想が魅力。6年以上の冬眠期を経て、本作を発表。

講談社◆話題の文芸書

村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011

But Writing About Them In Japanese

短編から浮かんでくる村上春樹の全貌！

なぜ、村上春樹は世界を必要としてきたのか?

英訳された「短編」を徹底的に読み込むことによって、
初めて見えてきた、小説家としての村上春樹の「闘い」。
現代文学のトップランナーの「核」に迫る、決定版「村上春樹」論！

加藤典洋　定価3,780円(税込)
ISBN978-4-06-217030-7

講談社　〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

現代作家が選ぶ世界の名作リターンズ③　選・中島京子

鰐（ワニ）

ドストエウスキイ著　森林太郎訳

（前略）先づこゝまでは万事無事に済んだ。誰一人災難が起つて来ようとは思はずにゐた。細君は大小種々の猿を見て夢中になつて喜んでゐる。そしてあの猿は誰に似てゐる。この猿は彼に似てゐると、我々の交際してゐる人達の名を言つて、折々愉快で溜まらないと見えて、忍笑をしてゐる。実際猿とその人とがひどく似てゐる事もあるので、己も可笑しくなつた。ところが、小屋の持主は、細君がまるで相手にしないので、自分も一しよになつて笑つて好いか、それとも真面目でゐるが好いか分からなかつた。そしてとう〳〵不機嫌になつた。

丁度ドイツ人が不機嫌になつたのに気の付いたと同時に、突然恐ろしい、殆ど不自然だとも云ふべき叫声が小屋の空気を震動させた。何事だか分からずに、己は固くなつて立ち留つた。そのうち細君も一しよに叫び出したので、己は振り返つて見た。なんと云ふ事だらう。気の毒なイワンが鰐の恐ろしい口で体の真ん中を横銜へにせられてゐるのである。水平に空中に横はつて、イワンは一しよう懸命手足を動かしてゐたが、それは只一刹那の事で、忽ち姿は見えなくなつた。

かう云つてしまへばそれまでだが、この記念すべき出来事を、己は詳細に話さうと思ふ。己はその時死物のやうになつて、只目と耳とを働かせてゐたので、一部始終を残らず見てゐた。想ふに、己はあの時程の興味を以て或る出来事を見てゐた事は、生涯又となかつただらう。その間多少の思慮は働いてゐたので、己はこんな事を思つた。「あんな目に逢ふのがイワンでなくて、己だつたらどうだらう。随分困つたわけだ。」それはさうと、己の見たのはかうである。

鰐は先づ横に銜へてゐたイワンを口の中で、一捏捏ねて、足の方を吭へ向けて、物を呑むやうな運動を一度した。イワンの足が腓腸まで見えなくなつた。それから丁度翻筠族の獣のやうに、曖気をした。そこでイワンの体が又少し吐き出された。イワンは鰐の口から飛び出さうと思つて、一しよう懸命盤の縁に両手で摑み付いた。鰐は二度目に物を呑む運動をした。イワンは腰まで隠れた。又曖気をする。又呑む。それを度々繰り返す。見る見るイワンの体は鰐の腹中に這入つて行くのである。とう〳〵最後の一呑で友人の学者先生が呑み込まれてしまつた。その時鰐の体が一個所膨んだ。そしてイワンの体が次第に腹の中へ這入り込んで行くのが見えた。己は叫ばうと思つた。その刹那に運命が今一度不遠慮に我々を愚弄した。鰐は吭をふくらませて、又曖気をした。想ふに、餌が少々大き過ぎたと見える。曖気と一しよに恐ろしい口を開くと突然曖気が人の形になつたとでも云ふ風に、イワンの首がちよいと出て又隠れた。極端に恐怖してゐる、イワンの顔が一秒時間我々に見えた。その刹那に鰐の下顎の外へ食み出したイワンの鼻から、目金がブリツキの盤の底の、一寸ばかりの深さの水の中へ、ぽちやりと落ちた。なんだか絶望したイワンがわざ〳〵この世の一切の物を今一度

鰐見物に出かけて行った男が鰐にすっぽり丸呑みにされ、それなのに男は鰐の中で生きており――というドタバタした話である。

鰐の飼い主がオレの鰐によくも入り込んでくれたなと怒り出し、鰐の中の男は理路整然と妻や友人に指示を出し、事情を聞いた同僚はあの男は進歩主義者だからいずれこんなことになると予感していたと言い、語り手である友人は、呑まれたのではなく鰐の腹に「派遣された」ことにして給料を出してやるわけにいかないものかと同僚と相談を始める。ともかく、悲劇的なはずの事故がぜんぜん悲劇として扱われずにどんどんズレていく。

鰐に呑み込まれた男が最初に気にするのは外聞。「外国旅行の許可を得てゐながら、鰐の腹の中に這入つてぐづ〳〵してゐると聞いては、どうも気の利いた人間のやうには思はれまいて」。そして、いったん家に帰ることにする友人に鰐の中から男は声をかける。「晩にもう一遍来てくれ給へ。君は忘れつぽいから、直にハンケチに結玉を一つ拵へてくれ給へ」って、友達が鰐に呑まれた衝撃的事実を半日やそこらで忘れる人があるものか。鰐に消化されない理由は、男によればまずはロシア製の服や長靴に守られ、次に自分が「意志の力を以て」抵抗しているからだそうで、緊張を解くと「僕の体が馬鈴薯や挽肉と同一な運命に陥るまいものでもない」と、やはりそのへんは気になるご様子。この鰐の中の男がドストエフスキーの登場人物だけあって、鰐の内側の空虚さからロシアの抱える諸問題にいたるまで、旺盛にしゃべる、しゃべる。

「鰐」を森鷗外が翻訳しているとは、青空文庫をチェックするまで知らなかった。ドストエフスキーには珍しいユーモア小説と言われているが、鷗外訳はかなり笑いポイントが高いような気がする。ロシア語→ドイツ語→日本語の孫訳になるわけで、原卓也訳などと比較してみると、どうもオリジナルと少し違うんではないかとか、誤訳かもと思われるところもある。でも、明治のちょっと古めかしい言葉遣いが不条理な雰囲気と妙にマッチして、独特のユーモアを生んでいるところに抗しがたい魅力がある。

青空文庫には翻訳作品は少ないけれど、「世界の名作リターンズ」なので海外文学を選んでみた。ドストエフスキー×鷗外と、夢の競演っぽいところもお得感満載。

中島京子
Nakajima Kyoko

64年生。田山花袋から100年後の現代を舞台にリメイクした『FUTON』でデビュー。花袋版では一人だった煩悶する男が二人になり、情けなさも倍増。後の直木賞受賞作『小さいおうち』にも繋がる、林芙美子らの女中小説を本歌取りした『女中譚』など、ブッキッシュかつエンタテインメント性の高い作品は、多方面で評価される。

見て暇乞をしたやうに思はれた。併しぐづ〳〵してゐる隙はない。鰹はもう元気を快復したと見えて、又呑む運動をした。そしてイワンの頭は永久に見えなくなつた。

生きた人間の頭が、その時突然現はれて又隠れたのは如何にも恐ろしかつた、がそれが又同時に非常に可笑しかつた。事が意表に出た為めか、それともその出没の迅速であつた為めか、それとも目金が鼻から落ちた為めか、兎に角非常に可笑しかつた。己は大声で笑つた。無論己も直に気が付いた。どうも一家の友人の資格として、この際笑ふのは穏当でないに相違ない。そこで早速細君の方に向つて、なるべく同情のある調子で云つた。「イワン君は兎に角これでお暇乞ですね。」

この出来事の間、細君がどれだけ興奮してゐたと云ふ事を話したいが、恨むらくはそれを詳細に言ひ現はす程の伎倆を己が持つてゐない。兎に角細君は、最初一声叫んで、それからは全身が痲痺したやうになつて、ちつとも動かずにゐて、この出来事を、傍観してゐた。余所目には冷淡に見てゐるかと思はれる様子であつたが、唯目だけ大きく見開いて、目玉も少し飛び出してゐたやうであつた。とう〳〵御亭主の頭が二度目に現はれて、次いで永久に隠れてしまつた時、細君は我に返つて、胸が裂けるやうな声で叫んだ。己は為方がないから、細君の両手を取つて、力一ぱい握つてゐた。小屋の持主もこの時我れに返つて、両手で頭を押へて叫んだ。「ああ、内の鰹が。ああ、内の可哀いカルルが。おつ母さん、おつ母さん、おつ母さん。」

その時奥の戸が開いて、所謂おつ母さんが現はれた。頬つぺたの赤い年増で、頭に頭巾を着てゐる。その外の着物は随分不体裁である。この女は小屋の持主の女房だが、鰹を子のやうにして、カルルと云つてゐたので、持主がおつ母さんと呼んだと見える。年増は亭主の周章してゐるのを見て、顔色を変へて駆け寄つた。

そこで大騒が始まつた。細君エレナは嘆願するやうな様子で、小屋の持主の傍に駆け寄つたり、年増の傍に駆け寄つたりして、「切り開けて、切り開けて」と繰り返した。誰が切り開けるのだか、何を切り開けるのだか分からないが、夢中になつて我を忘れて叫んでゐる。

併し小屋の持主夫婦は細君にも己にも目を掛けずに、ブリツキの盤に引つ付いて、鎖で繋がれた犬のやうに吠えてゐる。

持主は叫んだ。「助かるまい。もう直ぐにはじけるだらう。人一疋、まるで呑んだのだから。」

女房も一しよになつて叫んだ。「どうしよう、どうしよう。内の可哀いカルルちやんが死ぬだらう。」

ドイツ人は又叫んだ。「あなた方は我々夫婦を廃れものにしておしまひなさる。これで夫婦は食へなくなります。」

「どうしよう、どうしよう」と女房は繰り返す。

「切り開けて、切り開けて。あの鰹の腹を切り開けて。」細君は嘆願するやうな、命令するやうな調子で、ドイツ人の上着の裾に絡み付いて、かう云ふのである。

ドイツ人は叫んだ。「あなたの御亭主が内の鰹をおこらせたのだ。なぜおこらせたのです。もしそれで内のカルルがはじけたら、あなたに辨償して貰はなくてはなりません。裁判に訴へます。わたしの子ですから、一人子ですから。」

このドイツから帰化した男の利己主義と所謂おつ母さんの冷刻とを見て、随分腹が立つたと云ふ事を、己は白状せずにはゐられない。それにエレナがいつまでも同じ要求を繰り返してゐるのも、己には気になつてゐる。丁度この新道の隣で誰やらが素食論の演説をしてゐる。そいつがこの室へ這入つて来るかも知れないと云ふ心配が、一層己を不安にする。エレナが嘆願するやうな、煩悶するやうな調子で、今のやうな要求を、いつまでも繰り返してゐる所へ、あんな人間が這入つて来ようものなら、どんな間違ひが起るかも知れない。己のかう思つたのが決して杞憂でないと云ふ事が間もなく証明せられた。突然この室と帳場とを隔てゝゐる幕を横へ引き開けて、その戸口に、髯男が一人、手に役人の被る帽子を持つて現はれた。この男は室内に這入つては来ない。足は敷居より外を踏んでゐて、上半身を前へ屈めて顔を出してゐる。多分入場料が払ひたくないので、室内に踏み込んで、見せ物の持主に金を取られないやうに用心してゐるのだらう。この髯男の顔を出した時、己は実にぎよつとした。

髯男は体の平均を失はない用心をしてゐて、かう云つた。「奥さん。あなたの今言つてお出になる事は、どうもあなたの精神上の発展が不足だと云ふ証拠になりさうですね。詰まりあなたの脳髄には燐の量が不足してゐるのです。進歩主義と人道との代表者が発行してゐる諷刺的の雑誌がありますが、その雑誌であなたの只今言つてお出になる事を批評しても、あなたは苦情を言ふわけには行きますまい。そこで。」

髯男はこの口上をしまひまで饒舌る事が出来なかつた。見せ物の持主は自分の動物を置いてゐる室に、入場料を払はずに、顔を出して、何やら饒舌る人のあるのに気が付いて、ひどく腹を立てゝ飛んで来て、進歩主義と人道との代表者を、聞き苦しいドイツ語で罵りながら、戸の外へ押し出した。何やら戸の外で言ひ合つてゐるのだけが聞える。間もなくドイツ人は室内に帰つて来た。そして髯男を相手に喧嘩をして起した怒を、気の毒にもエレナに浴せ掛けた。自分の亭主を助ける為めにドイツ人の可哀がつてゐるカルルに手術をさせようと云ふのが、不都合だと云ふのである。

持主は叫んだ。「なんですと。可哀いわたしのカルルの腹を切り開けて貰ひたいと云ふのですか。それよりあなたの御亭主の腹でも切り開けて、お貰ひなさるが好いでせう。一体わたしの鰹をなんと思つてゐるのです。わたしの父も鰹を見せ物にした。祖父も鰹を見せ物にした。息子も鰹を見せ物にするでせう。わたしは生きてゐる間鰹を見せ物にする事を廃めようとは思ひません。わたし共は鰹を見せ物にするのが代々の商売です。わたしの名はヨオロツパ中に知らない者はない。あなたなんぞを、ヨオロツパで誰が知つてゐますか。さう云ふわけですからあなたはわたしに罰金を出さなくてはなりません。分かりましたか。」（後略）

フョードル・ドストエフスキー
Fyodor M. Dostoevski

一八二一―一八八一。言わずと知れたロシアの大文豪。明治の昔はもちろん、現代でも新訳『カラマーゾフの兄弟』がベストセラーとなるなど、日本でもっとも愛されている小説家のひとり。「長篇はハードルが高い」という人には、『鰐』をはじめとしたユーモア短篇小説集がおすすめ（講談社文芸文庫刊）。

「鰹」は、電子図書館「青空文庫」（http://www.aozora.gr.jp/）で全文を読むことができます。また、『鷗外選集　第一五巻』（岩波書店）に、解説とともに収められています。

旧作異聞 ㉕

ご当地文学篇

千葉県浦安市、といったらみんなが思い出すのは東京ディズニーリゾート（TDR）だろう。しかし、文学ファンを気取るなら「浦安？　そりゃもう『青べか物語』の土地でしょう」と答えていただきたい。

「べか（べか舟）」とは貝や海苔採りに使うひとり乗りの小舟のこと。時代小説の書き手として知られる作者の山本周五郎はまだ二〇代だった昭和初期、足かけ三年、浦安でひとり住まいをしていた。『青べか物語』（一九六一年）はその頃の経験をもとにした作品といわれている。

小説は〈浦粕町は根戸川のもっとも下流にある漁師町で、貝と海苔と釣場とで知られていた〉と書き出され、田畑と海と川と「沖の百万坪」と呼ばれる海側の荒地に囲まれたこの町が〈孤立していた〉こと、また貝の缶詰工場や貝殻を焼いて作る石灰工場のほか、釣客目当ての釣舟屋と「ごったくや」といわれる小料理屋（は表向きでじつは私娼窟）が多いことを伝える。

売れない作家の「私」は、ある日、地元の老人から青いペンキで塗られたべか舟を買わされる。小学生にまで「あのぶっくれ舟か」と軽蔑されるようなボロ舟だ。「私」は気が重くなるが、それでもやがては青べかを漕ぎ出して釣りや読書をし、町の人々の身の上話に耳を傾けたり、噂話をメモしたり、町を写生したりしながら暮している。テキストの大部分はこうして町の人々から伝え聞いた話であり、三〇あまりの短い小話を集めたその印象は、小説というより文字で描いたスケッチ集に近い。

が、一見随想ないしルポ風のこの作品をノンフィクションと思ってはいけない。浦安町ではなく「浦粕町」、江戸川ではなく「根戸川」とわざわざ命名されているのは、これがフィクションであることの証し。

さらに注意すべきは、艶っぽい逸話が妙に多いことである。〈この土地では、どこのかみさんが誰と寝た、などという話は家常茶飯〉で、〈この土地で恋といえば、沖の百万坪にある海苔漉き小屋へいって寝ることであった〉。性に対しておおらかなことが「浦粕」の特徴で、実際ここでは「ええーっ！」というような色恋がらみの悲喜劇が平然と語られているのである。近代的な恋愛のルールの外にある、孤立した海辺の町！

平野謙は新潮文庫版の解説で、『青べか物語』には佐藤春夫『美しい町』（『美しき町』の誤記？）にも似た「詩的なファンタジー」の匂いがあると指摘しているが、『美しき町』が「上半身のユートピア」を夢想する物語なら『青べか物語』に描かれた浦粕は「下半身のユートピア」だろう。

すると問題は、観察者ないし記録係に徹しているかのような語り手の位置である。売れない作家が俗世と隔絶された異郷に赴いて一時の癒しを得る、という構造を考えれば、これは川端康成『雪国』（一九三七年）や永井荷風『濹東綺譚』（一九三七年）と同質の物語なのだ。ただ『雪国』や『濹東綺譚』の主人公が妙齢の女性とネンゴロになるのに対し、『青べか物語』の語り手に与えられたのは一艘のボロ舟にすぎない。

「私」と青べかの関係は微妙である。杭を離れて行方不明になるわ、ぶっくれ舟と罵られるわ、漕ごうとすれば抵抗するわ、思い通りにならない青べかを「私」が「彼女」と呼ぶくだりがある。〈私が彼女に対する憐れみや、愛情や劬りをかなぐり捨て、悪童どもと同じように、それが正しく青べかにすぎないと認めたとき、初めて彼女は私に身を任せた〉

ほんとに舟だったのォ？　あやしいー！　なんて余計な詮索したくなるけど、それはまあどうでもいい。作中で青べかならぬ『青巻』（青い本）という翻訳書を読んでいる語り手はしょせん「上半身の世界」の住人で、だから最後は舟も捨て、浦粕を逃げるように去るのである。三〇年後、「私」はすっかり変容した浦粕を訪ねるが、かつて親しくしていた人々は不思議なくらい誰も「私」を覚えていない。ラストのこの非現実感は独特で、かつての浦粕が実在しない「おときの国」だったように思えてくる。

「沖の百万坪」は現在は埋め立てられてベッドタウンとなり、一九八三年以降はその一角にTDRもやってきた。まるで性質の異なる舶来の「おときの国」の出現はやや皮肉。しかし、ウォーターフロントの広大な埋め立て地ほど工場に適した場所はなく、浦安も一時は工場排水に悩まされていた。三月の震災では激しい液状化現象に見舞われた浦安市。その立地ゆえの自然との長い格闘の歴史を思うと、『青べか物語』の呑気さは小春日和のよう。幸福なご当地文学なのだ。この立地を「下半身」にからめて読み解くことも可能だけれど、ま、下品になるのでやめておこう。

『青べか物語』
（新潮文庫）

斎藤美奈子
Saito Minako

56年生。94年、『妊娠小説』で評論活動をはじめる。古典とベストセラー、時事問題からマンガ・アニメまで、題材の硬軟を問わず舌鋒鋭く論じる著作には、読者の物の見方をひっくり返す「目からウロコ」が満載。『文芸誤報』『本の本』など。

3・11の未来
日本・SF・創造力
豊田有恒、瀬名秀明、新井素子、押井守ほか、
SF作家ら26名が、いま、考える科学と言葉、そして物語……。
【監修】笠井潔／巽孝之
【編集】海老原豊／藤田直哉
【忽ち重版】●1890円

小松左京
最後のメッセージ

●言葉の魔術師が贈る短篇小説の醍醐味●
ナボコフ全短篇
Vladimir Nabokov
Collected Stories
大好評
重版出来!

「言葉の魔術師」といわれる20世紀きっての多言語作家ナボコフ。ベルリンに亡命していた20代初期から名作『ロリータ』発表直前まで書かれた短篇を編年体にまとめ、漏れなく収録。『ナボコフ短篇全集Ⅰ・Ⅱ』の65篇を新規に改訳。また新たに発見された3篇を加えた、英露文学者のコラボレーションによる決定版短篇全集。
●8190円
秋草俊一郎・諫早勇一・貝澤哉・加藤光也・杉本一直・沼野充義・毛利公美・若島正 訳

作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4/価税込
TEL03(3262)9753　FAX03(3262)9757

草子ブックガイド早稲田文学編
特別版
玉川重機
私、内海草子は縁あって
青永遠屋
「青永遠屋」という古本屋さんでお手伝いさせてもらっています
読ませてもらったお礼に、私は感想文――ブックガイドを本にはさみます
店長さんは私なんかのブックガイドをとても楽しみにしてくれてます ウレシイ
青永遠屋さんには店長さん、店員の岬さん、猫のしおりがいます
店長です
岬です
しおりだにゃ
私はここの本をいつもただで読ませてもらっています大好きな本のある空間に毎日いられて幸せです
そんな私のブックガイドを講談社さんが数ヶ月に一度、漫画にしてくれます
今日は新しいのが出来たので編集さんにお渡ししに来ました
草ちゃ～～ん!! でーきちゃったー!! できちゃった～～!!
へ…?
出来…た…?
完成したのよ! 単行本!!
担当編集・F施さん
草子ブックガイド 1
玉川重機
「草子ブックガイド」第1巻がっ!!!!!!!
ひぃ…やぁ～～…
言葉にならない
ウフフ
一冊にまとめるとズッシリとした…
読みごたえがありすぎる本になっちゃったわ
どうしよう
そうだっ!!
お世話になってる早稲田文学さんにっ
ホヤホヤ
できたて
単行本、持って行こう!!
これもまた、数ヶ月に一度、私は早稲田文学さんが出しているフリーペーパー「WB」でも
芦川線にゆられて
ブックガイドを漫画にしてもらっているのです
早稲田文学編集室
こん…にち…は――…

F施　草子ちゃんにはこれまで4冊紹介してもらいましたけれど、みなさん、お気に入りのブックガイドはどれですか?

M田　トルーマン・カポーティ『ティファニーで朝食を』が、かわいい絵で紹介されていましたよね(第3—4話)。草子の想像で、世界が豊かに広がっていく……あの場面を見て、「本に浸るってこういうことだよね」って思いました。

Y山　**金髪のカツラを被った草子ちゃん**がかわいいんですよね!

M田　私は絵がすごい苦手で、生徒に配るプリントにさらりと描けるといいなといつも思っているので、あんなふうに表現できるのは羨ましいし、「ありがとう!」って(笑)。

Y山　先生、草子ちゃんが描いてるわけじゃないですよ(笑)。そういえば、読書感想画ってありませんでした? 本を読んで、その一場面を絵にする課題。

F施　『宝島』で財宝までみっちり描いた! 自分の物にするような気持ちでニヤニヤして。『草子ブックガイド』でも『ロビンソン漂流記』の「船からとってきた物」「自分で作った物」がぜんぶ絵になっていてワクワクするんだよね。

Y山　でも『草子ブックガイド』と違って、絵を描いても「頭の中のイメージはもっときれいなのに」ってイラッときたり。感想文のほうが、自分がどう考えたかを入れやすかったかな。ただ、感想文自体が嫌いだったんですけど(笑)。

F施　本当? めちゃめちゃ好きだったな。担任の先生に宛てた手紙の感覚で「私はこの物語をこう読んだんですが、先生はどう思いますか」みたいにみっちり書いてましたね。

M田　草子みたいだね(笑)。

Yキ　草子は本を自分に引きつけて読んでいるよね。私は読書とは個人的な作業だと思ってるんだけど、その自分だけの体験が他人にも伝わるというのはどういうことなんだろう。

Y山　教師や親の期待に合わせた「優等生」っぽい読書感想文は、表彰されたとしてもあんまり伝わらないですよね。

Yキ　そう。草子は誰かに紹介しようという気持ちでは読んでいるのではないし、ブックガイドも自分が感じたことを書いている。だからこそおもしろい。

M田　物語のなかに出てきた**ブックトーク**(第4話)、私もよくやるんです。基本的に生徒が好きな本を紹介してもらうの。「いい本だ」より、「読んで感動したから伝えたい」のほうが、生徒は話しやすいんですよね。だから江波先生と草子のブックトークに「そうなんだよ!」って。

＊＊＊

F施　草子ちゃんは古本屋の青永遠屋(おとわや)で捕まらなければ(第1話)、ずっとひとりで読んで、誰に宛てるでもなくブックガイドを書いてたかもですね。棚の本を黙って借りて……。

M田　そうそう、ちょっと悪い顔をして。

Yキ　あれ、万引きですよね。書店で働く者としては、まったくおすすめできない(笑)。

F施　ヘタレなのに大胆なところがある(笑)。

Y山　逆に、お父さんに売られちゃった本を青永遠屋に取り返しに行くときも、おどおどしながら我を通してますしね。

Yキ　草子はすごい頑固だし、柔軟性もない(笑)。

M田　図書委員にはいっぱいいますよ、そういう子。ねえ、Y山?

Y山　**「ここだけは絶対に曲げない!」**と押し出すせに、そ

M田：高校司書教諭。科目は現代文と古典。　Yキ：都内某所の書店員。　F施：『草子ブックガイド』の担当編集者。　Y山：大学生。M田先生の元教え子。

れを周りにわかってもらう努力の苦手な子が多い……って、私のことじゃないですか（笑）。

M田　そのくせ、自分の主張が他人にどう影響するか、「あんなこと言っちゃった！　どうしようどうしよう!?」ってどきどきしてるんですよ。

Y山　草子を見ていると自分の過去を**反省させられます**。あと現在もちょっと（笑）。

M田　私も小さいころは人付き合いが下手で、本がきっかけで話せるようになったタイプなので、「そうだった、こんな世界にいるといいんだよ」って思い出しました。

Y キ　私はこういう子には会ったことないな……。

M田　気づいてくれてなかっただけかも（笑）。

＊＊＊

Y山　草子ちゃんって、いろんな小説の世界に入り込んで、コスプレをして紹介するじゃないですか。

F施　物語の世界に自分が自然に馴染んでいく感じが伝わってきて、すごく好き！

Y山　あれを読んで、中高生のころ、文体に癖のある本を読むと、自分の思考の文体まで影響されたのを思い出しました。それで授業中にこんがらがっちゃって……。

F施　**あるある**。

Y山　読書も、「本が自分に入ってくる」というより「自分が本に入っていく」感覚で読んでたんですけどね。

Y キ　大人になると、比較対象も増えるし、一歩引いて読むようになるよね。中高生のころの読書感覚って、今の自分にはもうないんだろうな……逆に、草子の読み方がこれからどういうふうに変わるのか、変わらないのかも気になりますね。

M田　高校生と付き合っていて気づくのは、「外に世界がある」とわかってるんだけど、家族とか友人との関係が彼らにとってすごく大きいぶん、そこで完結するんですよね。大人には「ほんのいっとき」のことが草子の歳くらいだと本当に長い時間で、人生の重大事項になるんだよね。

Y山　高校のときは、家と学校から逃げられない感じが強かったです。他人に興味が持てないわけじゃないけど、範囲が狭くて、そのぶん草子ちゃんみたいに本を読んでました。大学でいろんな人と会ってたくさん気にかけられるようになったとき、本の読み方も切り替わったのかも思います。

M田　……成長したなあ。

Y山　先生にはすごいご迷惑をかけましたよね。図書館から出てこないし、こっそり相談もしたし……恥ずかしい。

M田　そんなこと言われると**泣いちゃうよ**（笑）。

＊＊＊

F施　草子ちゃん、授業中に読んでた本を没収されそうになって逃げ出し、青永遠屋さんに行ってサボりますよね。そんな子って多いですか？

M田　そこまではいかないけれど、図書館には司書が必ずいて、生徒を受け入れています。いわば「避難所（アジール）」なんですよ。私たち教員は、つねに生徒を評価する役目でしょう？　でも、司書とか保健室の養護教諭は、生徒を評価しないから。

F施　評価なしに、自分を受け入れてくれる場所なんですね。

M田　学校には来られなくても司書室には来られる子もいて。うちの学校の司書室には**お茶とお菓子がいつもあって**、生徒が食べていても教員に叱られない（笑）。

Y山　「司書室は治外法権」みたいに勝手に思っていました。

F施　まさに青永遠屋ですね。

M田　草子たちも「居場所」って言葉を使いますよね。それって大事だと思うんです。彼女の場合、青永遠屋の店主さんがアジールを作ってくれる人だよね。

F施　親とか友達とかの縦横の関係じゃなく、斜めから店主が入ってくる、あの関係がいいなあって思います。

Y山　青永遠屋で働く前の岬（みさき）くんが、店主さんがつくった「西行の棚」に惹かれる場面（第6話）がありますよね。

F施　棚の前に座り込んで読むんですよね。お茶まで出してもらって（笑）。

Y山　すでに読んでいた本もあるのに、改めて棚に並べられて、本と本のつながりが見えてきた場面。あれ、いいなあって。

F施　おもしろい書店さんの棚は見ているだけでも楽しいですよね。誰かといっしょに行って、「これ読んだ?」「あれ読んだ?」みたいに話すのも楽しい！

Y キ　お店でも、男の子が一緒にいる女の子に熱く語っているのをよく見かけますね。

Y山　男子は語りがちですよね。

Y キ　そう！　つい盗み聞きしたくなって、近くに行っちゃう（笑）。

F施　語られたいですよね。

Y山　そうですか!?　みんな「どや顔」で自信満々に……。

Y キ　そのわりに、喋っていると「あれ、何だっけかな」とか言って、結構いいかげん。

M田　昨日手に入れた知識を、さも昔から知ってるように（笑）。

Y キ　でも、それがいい！**「初々しくて素敵、今しかできないわ！」**と思って、聞いてる（爆笑）。

M田　店主に聞いた話を、自分が発見したかのように岬くんが草子に語る、みたいな感じ？

Y山　「たかがロビンソンに何日かけてんだ?」と言ったら「ロビンソンは三部作だよ」とツッコまれ（笑）。

Y キ　ツッコまれている男子！　いいですね!!

＊＊＊

Y キ　草子はずっと今のように読んでいくのかな。私、高校の一時期ぱたっと本を読まなくなったんですよね。

Y山　離れる時期もあるかもしれませんね、私はまだだけど……。

Y キ　人との関わりのなかで変わるのかもしれないし、何かの本をきっかけに変わるのかもしれない。

F施　それこそ、彼氏ができたら読まなくなるかもしれない（笑）。

Y山　**同級生の潮崎くんとの関係がアヤシイ**ですよね（第4話）。

Y キ　ここまで本の中に入り浸っている子が、さて世間様の波にぶつかったとき、それをどう乗り切っていくんだろう、というのは気になるよね。

F施　現実で挫折するとか、逆に彼氏ができるとか。

M田　そこ、こだわるね（笑）。

Y キ　なんであれ、世間の波にぶつかると、本の読み方も本との接し方も変わるでしょう？　以前と同じようには読めなくなる――成長と言うのか変化と言うのかわからないけれど、草子にはまだきてないですよね。

M田　そうすると、読む本も変わったりしますよね。みなさん、これから草子に読んでほしい本とか、紹介してほしい本ってありますか？

F施　潮崎くんのキャラクターを深めるために、「ギムナジウムもの」を紹介してほしいです！『車輪の下』とか、ドイツの神学校のエリートで線の細い少年を潮崎くんにやらせると、愛着のあるキャラとして定着するんじゃないかと。

Y キ　そうして彼氏に、でしょう？（笑）

M田　私は、飲んだくれのお父さんと草子の関係が気になるので、幸田文と森茉莉をぜひ。それぞれ幸田露伴と森鷗外が父親ですけど、「厳しい父」と「溺愛の父」だから。

Y山　尾崎翠！　「パンなんか食べてないで、詩の世界だけで生きていきたい」という女の子を草子がどう読むか、気になります。

F施　中南米文学は？　つまり……ガルシア＝マルケス！

Y キ　読むのがたいへん、読むのが（笑）。

F施　じゃあ、いま流行ってるところで、ハインリヒ・フォン・クライストの『チリの地震』とか。

Y山　関東大震災のとき、芥川龍之介が触れてた人ですよね。地震つながりですか？

F施　ううん、中南米の民族衣装を着せたら、コスプレとして映える気がしたから（笑）。

Y キ　いままで草子が紹介した本はSFがないですよね。ヴォネガットの『スローターハウス5』とか、いいと思うんだけどな。ハードSFではないんだよね、草子のイメージって。

Y山　ケータイの使い方もわかってないくらいですからね（笑）。

F施　ハードSFの格好も捨てがたい……。

M田　未来から過去に戻れば、西行もやったし、『とりかへばや物語』や『雨月物語』みたいな物語系の古典も紹介してほしいな。柳田國男『遠野物語』も話が広がりやすいかも。

Y キ　『伊勢物語』や『日本霊異記』は？「牛になってしまえ！」って言ったら、早くも次の行で牛になってたり（笑）、古典は無茶苦茶な話が多いですよね。

M田　因果関係の説明がないですからね。

F施　牛も大きくていいですね！　でも、だったらモーパッサン『脂肪のかたまり』も……。

Y キ　**太ったコスプレさせたいだけじゃないの**？

Y山　だったらまず潮崎くんの好みを聞かないと！（笑）

切り取り線

切り取り線

※WB18号の表紙を飾った『草子ブックガイド』の生原画を、11月4日から「Yahoo! オークション」でチャリティとして出品します。ぜひご入札ください。詳しくは、本誌20頁の広告に記載されています。

◉翻訳完結

ウラジーミル・ソローキン「青脂Ⅲ」
クロード・シモン「農耕詩Ⅳ」

◉小特集

the century of McLuhan: 1911-2011

◉特集２

シリーズ【日本〝現代〟文学の、標的＝始まり】

§1 出発点としての〝大江健三郎〟

日本で読む大江

安藤礼二
武田将明
野崎歓
福嶋亮大
古谷利裕ほか

世界が読むÔÉ

中国・韓国
ポーランド
セネガル
ロシア
ブラジルほか

◉特集１

震災に。

［対談］古川日出男＋重松清

古川日出男「家系図その他の会話」
重松清「また次の春へ──盂蘭盆会」

［小説］**阿部和重**「RIDE ON TIME」
川上未映子「三月の毛糸」
松田青子「マーガレットは植える」
牧田真有子「合図」

［グラビア］篠山紀信「ATOKATA」序章

世界の被災地から

スマトラ・チェルノブイリ
カンタベリー・チリ・四川

and more...

早稲田文学④

好評発売中！

定価◉2300円（税込）
発行・発売◉早稲田文学会
A5判 648頁
ISBN978-4-948717-04-6

震災と原発事故から数か月──今も続く事態のなかで、そして無数に生まれては消えてゆく言葉に晒されながら、「文学とはなにか」「なにができるか」「どこに届くか」をめぐる何度目かの問いが浮上する。
30以上の言語に翻訳された大江健三郎作品の道筋を辿り、各地の被災地で発せられた言葉に耳をすましながら、闘争の／巡礼の／探究の一歩が、始まる。

Waseda Bungaku Free Paper
WB vol.24

2011年10月31日発行　（年４回刊）
Published by　浦野正樹
Edited by　芳川泰久 (Editor in Chief)
横山絢音　青山南
福井咲貴　貝澤哉
関口拓也　十重田裕一
大内啓輔　三田誠広
鶴岡眞屋子　山本浩司
家永楓
桃原賢一郎
山本浩貴
窪木竜也
朴文順　市川真人
(Concept & Direction)

Design　奥定泰之
Photograph　篠山紀信（p.01, 04）
Special thanks to　山本恵美子　山崎貴之
都丸尚史　布施洋子
洛西一周　吉本龍司
杉山和世　青木誠也
小林英治　大江健三郎

編集・発行　早稲田文学会／早稲田文学編集室
169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-9-12
小池第一ビル 203
TEL/FAX 03-3200-7960
http://www.bungaku.net/wasebun/

印刷　凸版印刷株式会社
112-8531 東京都文京区水道 1-3-3
TEL 03-5840-4845　FAX 03-5840-1676
http://www.toppan.co.jp/

▼早稲田文学史上最厚648ページの4号制作最中は、エネルギーを補給すべく朝昼おやつタおやつ夜を食べていたら、習慣とはおそろしいもので、発売後もその生活が続いています。WB「食欲の秋」号をお届けします。▽大食漢の日直さんが書いている通り、9月19日のデモに参加しました。真面目な話はエッセイに譲るとして、当日は、デモにもかかわらず迷子になったり（列を抜けて歩いたため）、もんじゅくんの愛らしさについて話したり（おっは。おはおは。おはようだよ。）、表参道でモデルのような格好をした女性のスカートが風でめくれきゃーきゃー言ったりして、デモと通行人の間を行き来していました。▽八代嘉美さんの連載が始まります。ついに理科系の科目も揃って、学校らしくなってきました。次は保健か遠足かしら？▽雅雲すくね氏の新作連載をお届けします。ほぼ毎月ウェブで更新予定。乞うご期待！▽大澤真幸氏、江南亜美子氏、キョウミナヲ氏の連載はお休みです。(K)
▼イラク戦争から脱原発まで、浮動票的な気軽さで歩みの列に加わったり眺めたりするたび思うのは、デモの中心になっているひとたちと道行くひとの温度差で、そこを解消しない限りは「市民の声」にならないよなと、あれこれ思案していたのですが、黄色い帽子のクボキと一緒に出かけた朝吹さんが、彼女らしいやわらかな文体で見事にその壁を破ってくれた気がします。柄谷行人氏と丸川哲史氏が行進を忘れて議論しながら立ち止まったり、奥泉光氏の太鼓にあわせて渡部直己氏と青山真治氏が歌ったり、津島佑子氏が「疲れたわねえ」とこぼしたり、大江健三郎氏がタクシーから箱乗り（じゃないけど）したり……攻撃的でなく対立的でもなく、なんだなんだと近寄りたくなる、そんな意思表示が定着して初めて、「デモの次」に出来ることを考えられる気もします。みなさんも見かけたら気軽に一緒に歩きませんか。▽玉川さんの「草子ブックガイド」も、敷居が高くも思える「ブンガク」と、馴染みの薄いひと、かつて馴染んだけれど離れてしまったひとの温度差を埋めようとする仕事です。「週刊モーニング」編集部の都丸さん、布施さんとの熱いトリオが生んだ単行本１巻、ぜひお手元に。▽次号は来年２月頃の発行予定。新人賞の最終候補も発表？ (lc)

カーリル×WB ウチのオススメ

レシピ版

図書館横断検索サイト「カーリル」のレシピ機能。お好きな本を集めてレシピをつくり、いろんなひとに届けることができます。ここでは、そのなかから、WB編集部クボキがピックアップ！

私、古本屋始めました!?

『女子の古本屋』
岡崎武志
個性豊かな女性の古本屋。始めた動機もお店のかたちもいろいろ。

『一箱古本市の歩きかた』
南陀楼綾繁
手始めにダンボール一箱から自分の古本を売ってみよう！

『古本屋の女房』
田中栞
自分で開業するのが無理だったら古本屋へ嫁に行く!?

古本・古本屋が好きな人にオススメ

古本屋は、おもちゃ箱のような発見に溢れている。なぬっ！　これは！　ひゃあ！　ふふふ。やったあ！　ふむ〜、と知らずに声が出る、本好きには堪らない世界。

ならば私も古本屋、始めようかなと妄想をしているワケでして。しかし、勇気と根性と金と忍耐がない……。

さあ、これらの本を読んで妄想を続けるか、本気で開業を目指すか!?　とりあえず古本屋さんは楽しいなあ、と。

rudiesgirlさん
このレシピの URL
http://calil.jp/recipe/10191070

図書館で働きたい。出来る事なら、国会図書館。ダメなら古本屋の店番。あれもこれも読みたいので図書館通いに励む。

ただしいことを巡るたたかい・政治哲学の本

『国家』〈上・下〉
プラトン
「みんなが「自分らしさ」を手にする社会が正しい社会です！」

『君主論』
マキアヴェッリ
「ひとも政治も見た目が9割」

『リヴァイアサン』
ホッブズ
「お前のものは俺のもの！（※命だけ除く）」

ものもうしたいひとにオススメ

「ただしい」ことってすごく難しい。なにが「ただしい」のかなんて誰も知らない。だから、画面の向こうのサンデル先生に問いつめられたとき、とっても苦しいわけです。ご飯も喉に通らないから、夕飯時に「白熱教室」は見ないことにしています。

そんなひとはけっこうな数いると思うのです。思いを馳せてみてしまうのです。一緒に考えてみませんか。

hidanemakerさん
このレシピの URL
http://calil.jp/recipe/10614002

男子学生。フリーマガジン・フリーペーパーを仲間とわやわやつくってました。でも、本もつくってみたかったのだよ。

古本屋さんには、小さなお店に古い本とか超古い本がいっぱい並んでる。その奥にはガンコそうなおじいさんとか超ガンコそうなおじいさんがいっぱいいる…だけじゃないんだよ、とこのレシピは教えてくれます。

女の人や若い人、バイトの人や古本屋さんと結婚した人…個人で経営する場合が多いからか、店主さんにも個性派がたくさんいるみたい。どんな人たちなんだろう、もっと詳しく知りたいな。

ネットがあれば誰でも本を売れるけれど、rudiesgirlさんがやるのなら、実店舗でお客さんとお話したいんだって。意外とそういう人は多いのかもね。ダンボール一箱分の蔵書で「本屋さんごっこ」ができるイベントもあるらしいよ。ぼくは「おもちゃ屋さん」か「ケーキ屋さん」ごっこがいいなあ。いっそもう全部やっちゃおう！　お店のかたちも、本との出会いもいろいろあるのがいいよね。

むずいよ、もう！　なにさ!!　という人のために（ぼくじゃないよ）、短くて読みやすい、大昔から前世紀までの「ただしいことを巡るたたかい」の本が並んでます。前の時代の本に、次の時代の人が答えようとしているから、いっしょに読むといいのかも。

みんなでオヤツを分けたり、誰かがイヤなことをやらなくちゃいけなかったりするとき、いつも悩んじゃう。誰かが多く食べたり、誰かに押し付けられたりしている。正しいって何なの？

サンデル先生はとっぴな例を出して、割り切った答えを出すけれど、もにゃもにゃ悩んでる hidanemakerさんはきっと割り切れないほうの人なんだね。「みんなして頭を抱えればいいんだ！」なんて言ってる。

とても大きくて立ち行かないように見える問題をかんがえるときに、問題から逃げるためじゃなくて、かんがえつづけるために役に立つ本です。

難しいこと言うとお腹へっちゃう。今日のご飯は何なの？

「カーリル・レシピ」で本を紹介してくれる人、大募集！

→「カーリル・レシピ」に登録すると、あるテーマの本を3冊以上集めて、書籍を紹介できます。テーマ設定は自由。レシピは3ステップで作ります。
❶まず、オススメしたい人とタイトルを決めて、❷本を3冊以上選び、❸思い入れを書き込みます！　準備ができたらはじめましょう。
カーリル・レシピ URL　**http://calil.jp/recipe**
「ウチのオススメ（レシピ版）」では毎回、**書かれたレシピの中から2つを選び**、ご許可をいただいた上で**紹介させていただきます。**

本を借りるならカーリルで！　http://calil.jp/

今日のカーリル
11月9日〜11日、図書館総合展に出展します！
遊びに来てね♪

Final Dragon Library World 7

ファイナルドラゴンライブラリー

米光一成 Yonemitsu Kazunari
64 年生。名作落ちゲー「ぷよぷよ」はじめ多数のゲームをつくるほか、小説をゲーム化しようと考える『日本文学ふいんき語り』や、『仕事を 100 倍楽しくするプロジェクト攻略本』等、ゲームという視点から幅広い活動を見せる。
http://blog.lv99.com/

ナカシマカズユキ Nakashima Kazuyuki
67 年生。作品によりまったく異なるテイストに描き分けるイラストレーター。以下の URL にはムチムチプリプリしたキャラクターたちが勢ぞろい。
http://www.nk-w.jp/

ぼくは勇者に向いてない『肩胛骨は翼のなごり』編

飛び降りたとき、ぼくは目をつむった。いままでのことを一瞬で思い出した。ある理由があって図書館に行ったぼくは、白い少女に会った。

「助かりたいのなら、これを読みなさい」

彼女は、ぼくに本を手渡す。読む。

ページに黒いシミができて、鼻血だと思ったら、もっと大きくなって穴になる。穴から出てきた白い少女に腕をつかまれて引っぱり込まれる。

なにがなんだか分からないまま不思議な空間にやってきた。ファンタジー小説？　いやロールプレイングゲーム？　もっとへんな空間だ。何もない白い世界だったり、ミノタウロスに襲われたり。

そして、突然現れる本。本を読んでいるあいだだけ時間が止まる。しゃっくりのように時間が痙攣している。本の中には、世界があった。ぼくが知らない、いろいろな世界。

そして本を読み終わっても、ぼくにはさっぱり理解できない不可思議な世界。どっちにころんでも、そこは、ぼくが知っているいつもの世界じゃない。

そして、少女の悲鳴。塔の上からスカートをひるがえし白い少女は落下する。ぼくは走る。壁を越えてジャンプする。

彼女とぼくは落下していく。

風。そして、もう何度目だろう。本が現れる。バサバサとめくれる本を、ぼくはつかむ。時が止まる。読み始める。

タイトルは『肩胛骨は翼のなごり』。

主人公は少年。引っ越してきたばかり。そうだ。ぼくも半年前に引っ越してきたばかりだった。

すっと気持ちが重なる。

古びたガレージの暗い陰、何かがいる。懐中電灯で照らす。

死んでる、と思う。蒼白い顔、ほこりまみれで蜘蛛の巣だらけ。

「なにが望みだ？」

彼は言う。

「アスピリンをくれ」

何度もげっぷをする。

「おれは何者でもない、といえる。かろうじて残っているのはリウマチだ」

肩の下になにかがある。細い腕みたいなものが折りたたまれているような、なにか。

「肩胛骨は、人間が天使だったときの翼のなごりだといわれてる。いつかある日、またここから翼が生えてくるって」

読みながら、自分が引っ越したときのことを思い出している。ぼくは、彼を見つけられなかった（見つけられなかった？）。

ものすごくファンタジックな小説。いや、リアルだ。いや、どっちだろう。ガレージの陰にいた「彼」は、天使と呼ばれるような存在だ。でも、ほこりまみれで、死にかけていて、息が臭い。月光の下で踊る幻想的で美しいシーンでも、彼の息は臭い。フクロウが運んでくる死骸のカスを食べている。生き餌を食っている獣の息と同じ臭い。

少年の妹は、病気で死ぬかもしれない。両親は涙をこらえている。苦い現実が描かれる。

現実から遠く離れてファンタジックだから美しいのではなくて、リアルで、汚くて、ダメなところもあって、だからこそ、美しい。

天使的な彼をあくまでも存在する生き物として描く。そうやっておいて、ファンタジックな一瞬を作り出す。めったにあるわけじゃないけど、現実にもこんな瞬間があることを知っている、もしくは願っているような奇跡的な一瞬。

なんの工夫もない言葉を使うけど、すばらしい小説だ。

バサバサバサ、ページがめくれ、落下の風圧で、読み終わった本が飛んで行く。

書いてあった一節を思い出す。“ときにはすべてを知りたい、知っておくべきだって気になる。でも、それはできない。見るべきことを見て、想像するしかできない”

奇跡を信じる。

ぼくは、肩胛骨から翼が生えてくるイメージを想像する。

To be continued.

第07回 『プチ・プロフェスール』の理緒ちゃん

げきからぶんがくにゅうもん

望月旬々
Mochizuki Shunjun

68年生。主として国内外の小説・演劇について「朝日新聞」「ポンツーン」等で望月旬名義の書評を手がける。著書に『日本文学にみる純愛百選　zero degree of 110 love sentences』（共著）。超がつくほどの辛い物好きで、職場にはカレー部があるとのウワサも。

〈不思議の国の……〉と言われたら、誰を連想する？

もしも、きみが、その質問に〈アリス〉と答えられたなら「文系」としてOKだし、〈トムキンス〉と即答できちゃうならば「理系」でGO！

ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』は、まるで、へんてこりんなキャラたちが繰り広げるナンセンスコントといった感じの、児童文学の名作。かたやジョージ・ガモフの『不思議の国のトムキンス』は、科学空想物語としてマンガのように楽しめる、物理学ガイドブックの傑作だ。

なんにせよ、いまこの文章を読んでいるからにはきっと、きみは、文学的にかなり「偏差値」が高い。まちがいなく、所属している「クラス」のなかでは、貴重な存在のはず。

そんな高貴なるきみにぜひとも覚えてもらいたい言葉が、「ノブレス・オブリージュ」。

高貴なる者には義務がある、という意味のフランス語だ。みんなよりハイレベルだったりリッチだったり……恵まれた環境にあるなら、その恵みを、みんなのためになるよう活用すべし！　という教え。アニメ作品『東のエデン』でもよく使われたセリフだけど、英雄や指導者といった「救世主」に求められる、危険をかえりみない献身的な姿勢のことだ。

東日本大震災のあと、（高貴でなくとも）心ある大人は、子どもの未来を守ることに必死になっている。きみの身近にいる大人たち（親や先生）もそうであってほしい、と思う。そうであるか否かを確認したいなら、こんなふうに質問してみるといい——うちの学校の給食は安全なの？

「ただちに健康に影響はありません」なんていう答えは今やもってのほかだし、なんの迷いもなく安全であると断言するような大人は信用しないほうがいい（西日本や北海道の人も他人事ではないぞ）。あと、お弁当を家から持ってくる子のことも、認めてあげたほうがいいな。

放射能に汚染された野菜、お肉、牛乳……は、できる限り60歳以上の大人に引き受けてもらうようにしよう。

子どもたちの怒りの声が、世の中を変えるんだ！

〈この本を手に取ってくれたあなたが10代であれば、私はまず謝らなくてはいけません。〉から始まる、小出裕章さんの『子どもたちに伝えたい——原発が許されない理由』は、だからこそ、これからの世代が知っておくべきメッセージとして受け止めたい（小学4年生＝10歳から読めます）。

というわけで、前置きが長くなってしまったけれど、今回ご紹介するのは伊与原新さんの『プチ・プロフェスール』。フランス語で「小さな教授」を意味するおしゃれな書名にもかかわらず（『星の王子さま』にちなんでいる）、怪現象に秘められたトリックを「科学オタクの女の子たち」が解明してゆく、連作短篇ミステリー小説だ。

恋愛音痴の大学院生とキュートな小学生が「探偵コンビ」を組んで、小中学生を震えあがらせる幽霊騒動・女子高生の受信する謎のラジオ番組・天才少年と連続猫殺し・共感覚者と不可能殺人……といった難事件の数々に挑む。

馬淵理緒ちゃんは小学4年生。お金持ちのお嬢様なのに、理論物理学の研究をしている家庭教師の仁科律先生みたいな「リケジョ」（理系女子）になるのが夢。ハンダごてを片手に物事を見極めようとする、好奇心たっぷりのメガネっ子だ。「カガク的って、こういうことでしょ？」が、決めゼリフ。それこそ、ガイガーカウンターを片手に放射線量を測定していかなければならなくなった時代にあって、じつに頼もしい「子役ヒロイン」の登場だ。

草食男子とか肉食女子とかいった「差別用語」も近頃ではすっかりおなじみだけど、はたして、リケジョが好きなのはどんな食べ物なのか、本書で調査してみたところ……。

物語は丸いストロベリーショートケーキを6等分する場面から始まるものの、これといった食事は描かれることなく、あとはブッシュ・ド・ノエル（薪の形をしたクリスマス用のロールケーキ）がおやつとして登場するくらい。

理緒ちゃんは、辛い料理は食べないのかな？　さすがに、「カレーの王子さま」は卒業してると思うんだけどね。

◉ベルクから生まれた本
食の職
小さなお店ベルクの発想
副店長 迫川尚子
愛される「味」「仕事」を生み出す秘訣とは？
食と仕事についての美味しい本。ベルク第2弾は職人vs経営者！

定価◉1,600円＋税
ISBN:978-4-86020-402-0
ブルース・インターアクションズ
http://bls-act.co.jp/

ロングセラー8刷！
新宿駅最後の小さなお店ベルク
店長 井野朋也
究極の大衆飲食店はこうしてできた！
そのノウハウを書いた本。ユニークな経営術がわかる。個人店が生き残るには？

定価◉1,600円＋税
ISBN:978-4-86020-277-4
ブルース・インターアクションズ

一万人以上がベルク立ち退きに反対署名！
詳しくはベルク・ブログ(http://norakaba.exblog.jp/)にて。

コーヒー ¥210
生ビール ¥315
Beer＆Cafe
BERG
ベルク
☎ 03-3226-1288
http://www.berg.jp
↑ベルク通信、全バックナンバーがご覧になれます。
JR新宿駅東口改札出てすぐ
（ルミネエストB1）
WB常設。コーヒーのお供に。

わたしたちの体育

第3回「Dランクの子!!」

青木淳悟
Aoki Jungo
79年生。前衛的な作風でディープな読者の多い新進小説家。『このあいだ東京でね』は東京という「都市」が主役の奇妙な話。待望の長篇『私のいない高校』はカナダから来た留学生の女の子ナタリー・サンバートンが登場する一味（以上）違った学園もの。

その不毛さについては重々承知していたはずだのに、何が楽しくて再び「教育の棚」へと足を運んでしまったのか……。広い店内に膨大な数の書籍が陳列されているなか、大学願書から幼児教育の知育本までが並ぶ充実した学参コーナーではなく、もう一歩進んだ人たちに向けた語学コーナーでもなく、そうした実用書とは垣根を隔てた学術書の多く並ぶある一角を目指すことになる。するとその書店の「人文カテゴリー」では、哲学・思想、社会学、歴史、宗教、精神世界、心理とつづく末尾にようやく教育の二文字が見出せるが、そこからさらに「教科別」と分類される並びに目的の「保健・体育科」の項目があった。

ここで改めてこの一帯のつまらなさについて振り返ってみるに、おそらくは教師による教師のための本があまりに多いことが、教育関係者以外の人間には興味の持ちづらいものにさせているのではないかと感じる。そもそも何らかの実践をするわけでもない小説家がネタ探しに訪れる場所ではなく、ここを定期巡回するようなことは不毛だと痛感し、以来「教育」からは足を洗ったはずだった。

今回も敗退が目に見えていながら、これらの棚のなかでも最も興味を持てなそうな「教科別」へと進んだのは、体育の本がそこにしかなかったから。迂闊にも学参コーナーを調べたり、体育館建築を扱う専門書を探そうとしたり、また娯楽・スポーツの解説本の並びでベースボール・マガジン社が発行する一歩先いくマッスルマガジン『かっこいいカラダ』を立ち読みした挙句、「体育は学校にしかない」と腹をくくってその場に臨んでみたところ、思いがけず一冊の魅力的な本を入手したわけである。これまで見向きもしなかった授業案等を書いた実践本のなかでも格別実践的なタイトルのついたものに惚れ込んでしまった。それがこの『結果責任が問われる「Cランクの子」への対応策〈5〉体育科編』（村田正樹著・明治図書）だった。

著者である小学校教諭の村田先生は、学級開きの日にいくつかの運動について「全員達成」の宣言をする。その一つが本書で最も詳しく指導法に触れている逆上がりだ（他には跳び箱の開脚跳び、縄跳びの二重跳び、壁倒立、水泳25mの解説も）。本書は体育の熱心な取り組みについてのレポートであり、タイトルの通り「C ランクの子」をいかに指導するかという教本のようなものでもある。

逆上がりは例の学習指導要領だと小学校四年生で取り組む課題とされているという。 また小学校体育の現場では、 指導の難しさに関して、「跳び箱3分　水泳3日　逆上がり3ヶ月」という言葉があるらしい。本書を読んで目が開かれる思いがしたのも、一つには指導者側から体育を見つめ直す契機となったところが大きかった。これまで小学校の体育を遊びの時間だとしか考えていなかった証拠だろう。

ただ漠然と昔を偲ぶ程度のことに留まらず、そこはやはり実技科目の体育なので具体的な実践を通した指導内容が示されており、読んでいるうちに眠っていた身体的記憶ともいうべきものが喚起される。鉄棒の練習技に的を絞ると、本書にはまず前回り下り、ふとんほし（鉄棒上で二つ折りにした体を腹だけで支える）、ふとんほし振り、前方支持回転（前回りで地面に下りずそのまま回転）、そして逆上がりと後方支持回転が出てくるが、どれも腹を支点にした過酷な運動であることを再認識しつつ、確かにその感触は覚えていた。

できる子とできない子とがいる。本書のいささか直截的なタイトルに出てくる「Cランクの子」とは、体育科での課題をすぐにこなせない児童のことだ。ちなみにこの書名は五冊あるシリーズに共通のもので、他の国語科、算数科、社会科、理科編はそれぞれ別の著者が執筆している。シリーズ名を見てこれはきっと版元の編集者が発案したにちがいないと邪推してしまうのだがどうだろうか。現場の教師がつけないだろうようなものだからだ。指導者たる著者の視線はできない子に向けられる。どうしてできないのかを観察し研究することで指導法に工夫を加える。「ふとんほし」ができない子には、それこそ布団を干すように鉄棒にマットを載せて「場づくり」をする。逆上がり全員達成の様子は紙面に掲載された学級通信「ファイン」でも紹介され、記念に教室で保護者を交えたパーティーを開いたり、さらにそれが学習発表会での「シンクロ逆上がり」の披露へとつながっていく。例えばこの本の目指すところが教師用のマニュアル本か何かだったら、単に指導法を詳述した味気ないものになっていたはずで、そもそもこうして手に取ることはなかっただろう。

このような授業での熱意に加えて著者の教育姿勢がうかがえるのが、ある民間の教育研究団体（TOSS）が主催する「検定」を受けるくだりや日本体育教育技術学会という場で後方支持回転の模擬授業をするところだった。そしてこの時の失敗と反省点を、TOSS体育授業研究会代表の根本正雄氏（著書多数の有名な先生）への礼状に書いた文章の一部さえ掲載されていて、著者の人間性が滲み出ているところだと思った。

〈後方回転系の技の中核的技術を指導するという大事な場面で、3つの間違いを犯していました。これでは楽しくないし、いい授業になるはずもありませんでした。

授業の山場を勘違いしていたため、指導案をなぞるだけの平板な展開になっていたのです。（中略　著者による）

予想外の出来事への瞬時の対応が、授業の善し悪しを決めます。その対応の幅の広さと的確さは、教師の力量を表すのですね。

今回は、柔軟な対応を身につけるための絶好のチャンスだったのですが、私はそれを逃してしまいました。本当にもったいないことをしてしまいました。〉

まるで反省文そのもののような礼状の文章が何ともいえず心に残った（そしてつい先日、家で妻に質問してみたところ、逆上がりができない子供だったことが判明。「鉄棒は握ると手が臭くなるから嫌いだった」という驚くべきD ランク発言を前に、これはもう「30歳の体育指導　鉄棒編」を決行せねばと思いました！）。

FUSOSHA BOOK
大鶴義丹14年ぶりの小説作品
その役、あて書き
大鶴義丹 著 ■定価1,575円（税込）
すべてはただピアノのために！
人気ジャズピアニストの真摯で痛切なメモワール
マイ・フーリッシュ・ハート
南博 著 ■定価1,995円（税込）

超世代文芸クオリティマガジン
ホームページからのご注文も可能です。全国の書店で発売中!
en-taxi
ODAIBA MOOK No.33 SUMMER 2011
[エンタクシー]33号
A5判 定価860円（税込）
責任編集
坪内祐三
福田和也
リリー・フランキー
好評発売中
[スペシャル・トーク]
石原慎太郎×西村賢太
小説家であり続けること
作品の身体性とインテリヤクザ
[特集]
マイ・リトルプレス
思い出の小出版社、雑誌
高山宏／植島啓司／樋口良澄
堀切直人／常盤新平
[リトルプレス小史]編 明石陽介×坪内祐三
[名出版社・小沢書店]編 秋葉直哉×坪内祐三
[小説]
重松清「また次の春へ」
佐伯一麦「空に刻む」
下地優希「ラック」
小池昌代「フェイク」
大竹聡「ジローの茄子はいまが植え〜ころ」
藤原敬之「トラブルシューター 帝人事件ファイル」
[新連載]生島淳「歌舞伎座がなくなって」
[評論]福田和也「三一致と古典主義／三島由紀夫と三谷幸喜」②
「vol.1」市川海老蔵
ホンマタカシ／津村記久子
加藤陽子／佐藤優／島田雅彦
大野更紗／能町みね子
内藤誠／萩原健太 ほか
扶桑社 〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1 http://www.fusosha.co.jp
エンタクシー バックナンバー●書店でご注文いただけます。各号の内容等は、本誌、または扶桑社ホームページでご確認ください。

数学への長い道

第4回 極端な話

円城塔
EnJoe Toh

72年生。大学で物理を研究していた理系作家。あなたの身近な後藤さんから銀河の彼方の帝国まで、あらゆるものを語ってみせる"大ぼら吹き"。作中にちりばめられた仕掛けがいつも読者を途方に暮れさせる。最新刊『これはペンです』が好評発売中！

以前、四回目あたりで算数パズルを出すかもと書いたのは嘘でした。

先日ふと目覚めると、隣で家人が激昂しており、どうもサンデル先生を罵っている様子です。サンデルとは無論、「ハーバード白熱教室」のマイケル・サンデル。正義や倫理の判断が揺らぐような、ちょっとパズル的な状況を設定してみせ、生徒をびしりと指さして意見を求めるあの人です。

何故朝っぱらからサンデル先生……と、前日夜にサンデル先生の授業を見て、その際の怒りが起き抜けに蘇ってきたらしいです。そう言われてもなというところです。しばらく放置しておいてから、どうどうとなだめ、話をきいてみたわけですが、どうやら例が極端なところが駄目らしい。

「そんな設定は現実的にありえない」

まあそうかなとも思います。

あなたはもう一人の人物と一緒にトロッコに乗っていて、線路の先には五人の人間がいたりします。そのまま行けば五人は轢かれ、あなたが隣の人物を線路に突き落とせばトロッコは止まり、死亡するのは一人ですみます。

とかいう奴ですね。

「ない」

まあ、なかなかそんな状況もないでしょう。

ちなみに、あなたの隣に乗っているのがサンデル先生だったなら、ほぼ間違いなくあなたを突き落としに来るでしょうから、どの道先に突き落としておくのが良策です。

思考実験というものなので何を考えても良さそうですが、どうもそうした思考方法を生理的に拒否する人がいるらしいのが新鮮でした。

これはうちだけの話なのかなと思っていたら、同じようにサンデル先生に対して怒っている人はわりといるらしく、そんな考え方で倫理的な問題を扱うことはできない、というあたりのようです。いやでも、トム・ゴドウィンの『冷たい方程式』論争とかあったしなあとか、カルネアデスの板とか古典だよねという話であって、今一つ焦点が定まりません。

極限的な状況を考えるのは物理学や数学では珍しくなく、そうすると取扱いが楽になったりするわけです。

「実無限とかないよ」

と言われたりすると、現代数学は色々困ります。もっとも数学の分野でも無限を認めるかどうかというのは長々議論されてきた話題であって、すぐさま受け入れられたものではありません。ある前提を受け入れることにより、色々便利に利用ができる。その一点がとてつもなく重要であり、更にはそうした“何か変なもの”を経由することにより、“現実的な結果”に辿りつけることが重要です。無限であるとか虚数とか。無限がなければ、まず微分が面倒ですし、虚数なしで交流の電気回路や電磁波を考えるのはつらい。虚数については揉めそうなので、機会があれば後にまた。

無限次元空間で計算を行い、有限次元でも正しく有効な結果を出すとかいう手はよく使われます。有限次元の中でやると滅法手ごわい計算が、無限次元空間を採用することにより簡略化され、見通しがとても良くなったり。それは神学だ――という意見もありそうですが、神学にも良いところがあったりします。使い方です。

数学はよくわからない――。

サンデル先生むかつく――。

この二つが密接に結びついている人というのは、結構多いのではないかという気がしています。誰か調査をしないでしょうか。そうした人は、「超光速で飛ぶ宇宙船」とかいう言葉を目にしたときにどう感じるかにも興味があります。

勿論これは、サンデル先生は数学っぽいので正しいとか偉いとか、もっともなことを言っているという話ではありません。ゲーム理論がキューバへ核ミサイルを撃ち込むかの議論に持ち出されたとか、確率微分方程式がウォール街で大人気だったといった話には、使い方を間違っているのじゃないかという疑問が湧きます。

わたし自身は別にサンデル先生に好悪の念は抱いておらず、むしろ面白いと思っているわけですが、こんな思考実験をしてみると意外な結果が出たりもします。

あなたはサンデル先生とトロッコに乗っており、線路の先には五人のサンデル先生が縛られています。

さて。あなたは襲いかかってくるサンデル先生を突き落とし、五人のサンデル先生の命を救うでしょうか。それとも突き落とされる危険をものともせずに、五人のサンデル先生を一気に亡き者にしようと試みるでしょうか――。

早稲田文学
震災チャリティオークション

このたびの震災および原発事故で被害を受けられた方々と、そのことに心を痛めていらっしゃるご家族やご親族はじめ関係者の方々に、心よりお見舞いもうしあげます。

早稲田文学でも有志の書き手たちの賛同のもと、復興支援を呼びかけて参りましたが、このたび『Yahoo!オークション』および中央共同募金会のご協力を得て本チャリティ・オークションへの出品を行い、支援に役立てていただくことといたしました。

初回は、阿部和重氏がチャリティのために女性作家9人のサインを集めた最新対談集を出品。ご好評いただきました（10月11日終了）。

11月4日からは、今号で特集の『草子ブックガイド』作者・玉川重機氏のWB18号表紙原画を出品予定です。

中村文則氏、村田沙耶香氏ほか、早稲田文学でお馴染みの書き手たちが続々出品予定。

詳しくは、下記ウェブサイトで。

オークションには早稲田文学ウェブサイト（www.bungaku.net/wasebun/）からアクセスできます。

我思う、ゆえに生命あり

第1回 プロメテウスの憂鬱

八代嘉美
Yashiro Yoshimi

76年生。専門は幹細胞生物学。再生医療研究と、SF小説・マンガ・アニメの文化批評を通じて、新しい生命観・身体観の構築を試みている。さらに、広く科学技術と社会の関係性について精力的に執筆をつづける。著書に『増補iPS細胞　世紀の技術が医療を変える』、『再生医療のしくみ』（共著）など。中日ファン。

わたしたちの周りには「科学」というものがあります。いきものの学問、といえば、「生物学」というジャンルになるでしょうし、病気やケガにあったときに遭遇する「死」の可能性から直接救ってくれるのは「医学」というものになるでしょう。こういうジャンルの研究を総合して、「生命科学」と呼ばれることもあります。

iPS細胞による再生医療だとか、ゲノム解析によるオーダーメイド医療だとか、新聞やテレビではさまざまな生命科学の進展が伝えられます。こうした研究は、大腸菌などの菌類からさまざまな培養細胞にはじまり、モデル動物と呼ばれるゼブラフィッシュのような魚類、マウスやマーモセット（小型のサル）のような哺乳類にいたるまで、さまざまな生物を用いて、生命現象を貫く原則を知ろうとしています。

でも、その原理がわかったところで、人はなぜ死ななければならないのか、なぜ生まれてくるのかというような意味を答えることには、残念ながらつながりません。そして、生命科学だけで「生きているとは何か」という命題に答えを出すことは困難です。

それは、やはりヒト一人ひとりが違う国の違う土地、違う人たちに囲まれ、違う時代に生きているから、です。科学には、「誰がやっても、やり方と条件を揃えれば再現ができるもの」という前提条件があるので、個人的な体験までを含めることは、その範疇には捉えがたいからです。

とはいえ、「生命科学」が生まれた背景には、「生命とは何か」という問いかけがあったことには、疑う余地はありません。わたしたち「いきもの」は、頼んでもいないのにある日突然この世界に引っ張り出され、今度はいくら名残惜しく思っても、この世界から追い出されることになります。そんな「生」と「死」という二つの極で閉じられた「生」というものは、ずいぶんと理不尽なものです。

そんな理不尽をしぶしぶでも納得するには、そこに何かの理由付けが欲しくなります。そこで浮かぶのが神話や宗教説話といった「お話」です。生きている間は死後の世界の修業の場とか、いいことをすれば良い形で生まれ変わることができるとか、そのバリエーションはさまざまですが、いきものが生まれ死ぬという不条理にも意味があると思わせてくれることで、まあやむをえまい、と思えたのかもしれません。

そして、宗教のお話は、ヒトがどうして生まれてきたのかについても、教えてくれます。キリスト教の聖書には「主なる神は、土（アダマ）の塵（アダム）で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」とありますし、古事記には伊邪那岐（イザナギ）と伊邪那美（イザナミ）の二神による国産み、ヒト産みについてが記されています。

しかし、わたしたちの心のなかには、「生命」という現象の深淵を覗き込むことへの畏（おそ）れも強く刻まれています。ギリシャ神話のプロメテウスという神様は、それまで神の世界が独占していた「火」を盗み、人間に与えることで、人類の文明を生み出したのですが、「火を盗んだ」罪でカウカソス山に磔（はりつけ）になり、その肝臓をハゲタカについばまれることになってしまいます。何より、神は不死であることからついばまれたそばから肝臓は再生し、終わることのない罪を背負わさせられました。

また、古代キリスト教の神学者・アウレリウス・アウグスティヌスはその著書『告白』で、精神の誘惑について語っているのですが、3つの忌むべき精神の誘惑の一つとして単に知識欲を満足させるための「好奇心」を克己しなければならない罪として扱っています。またカルタゴのテルトゥリアヌスという神学者は「不合理なるがゆえに我信ずる」（Credo quia absurdim）という言葉をのこしたといわれています。

古代ギリシャの昔から、先輩たちは「物事の来し方を知ろう」なんて、厄介ごとに関わりなさんな、幸せになれませんよ、と諫言（かんげん）してくれていることを思えば、彼らがその問いによってどんなイバラの道を歩んだのか、眼に浮かぶようです。

万学の祖といわれる、古代ギリシャの哲学者のアリストテレスは、生物学者としても『動物誌』『動物部分論』『動物発生論』といった著作ものこしていますが、彼は『形而上学』で、こう言い切っています。「すべて人間は、生まれつき知ることを欲する」と。いわば、生命科学の出発点の一つでしょう。そうして生まれてきたのが「生命科学」なのです。

16世紀になるとヤンセン親子が顕微鏡を発明し、1665年にはフックが細胞という概念を発見するなど、生命の現象がどんどん「目に見える」ものとなってきました。さらに18世紀に入ると、生命の現象を「見る」だけでなく、観察される対象が観察者の与えた条件にどう反応するか、つまり「実験する」ことによって、生命のあり方を知ろうとする研究者が増えていきます。切り取ったカエルの足に電流を流すことで、さも生きているかのように動くことを発見したルイジ・ガルヴァーニ、世界で初めて人工授精を試みたラザロ・スパランツァーニ、動物の解剖を重ねて近代外科学の父とよばれたジョン・ハンターなどは、その代表例ということができます。

そんななか、エポックメイキングとなる文学作品が現れます。それが1818年、メアリー・シェリーが書いた『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメテウス』です。若き科学者フランケンシュタイン博士が死体をつなぎあわせて「体」を作り、電流を流すことで「体」に生命を与える、というストーリーは、ガルヴァーニの実験（動物電気）に着想を得たものであり、「科学」が少しずつひとびとの近いところに現れ始めた、そんな時期だからこそ描かれた文学といえるでしょう。

しかし、お気づきの方もいるでしょう。サブタイトルに「プロメテウス」とあるように、この作品には神の意志に背き、「生命」をみずから創りだそうとしたフランケンシュタインの「思い上がり」に罰がくだされるような、そんなラストシーンが描かれます。言うなれば、科学というもので、生命という理不尽な現象の根源をたどれるのではないかという期待と、それを知ることを禁忌と感じる宗教的な生命観が入り交じるお話なのです。

わたしたちはその祖先からこのかた、「生とは何か」という「お話」を求め続けてきました。「生命科学」が積み上げてきた理論も、ひとつの「お話」の姿なのかもしれません。しかし、「科学」が大きな存在となる18世紀以降、「文学」には人間の心のうちに存在する欲求や畏（おそ）れ、そして科学の限界をどう考えるのか、さまざまなものが織り込まれてきました。わたしたちが神の御心という「物語」の内側にいきつづけていたのならば、人間はずっと「幸せ」だったのでしょう。それでも、その矩（のり）を乗り越えさせてしまう、そんな制御不能さ加減が「生命」を追いかける面白さなのかもしれません。この連載では、そんな文学のなかにある生命科学をとりあげ、それを描く文学の面白さを考えてみようと思います。

1/6909※

世界の言語を訪ね歩く 第3回

暴動と真空

エイドリアン・ラッシュモア＝デイヴィス
Adrian Lashmore-Davies
本文参照。

訳・武田将明
Takeda Masaaki
74年生。18世紀イギリス文学から21世紀日本文学まで縦横無尽に論じる英文学者・批評家。論文に「断端のノスタルジア―平野啓一郎と現代文学の条件」（『群像』2011年11月号）、訳書にデフォー『ロビンソン・クルーソー』（河出文庫）など。

2011年8月6日、ロンドン北部で警官が黒人男性を射殺したことへの抗議デモに端を発し、ロンドンだけでなくバーミンガム、リバプール、ブリストルなどイギリスの主要都市で次々に暴動が発生したことは私たちの記憶に新しいが、きっかけはともかく、街を破壊し火を放つ若者たちの姿は、もはや政治的な抗議行動とはかけ離れているようにも感じられた。この事態は、チュニジアから世界に伝播した「ジャスミン革命」とも、現在アメリカで拡大している反貧困のデモとも異なり、さらには2005年にフランスで起きた移民を中心にした暴動（これも警察に追われた移民の青年たちの死がきっかけだったが）と比べても説明しがたい。心に引っかかっていたところ、『WB』編集部が今回のイギリスにおける一連の暴動に関する原稿を求めていることを伺い、現地に暮らす知人に寄稿をお願いした。筆者のエイドリアン・ラッシュモア＝デイヴィス氏（Dr Adrian Lashmore-Davies）は、ケンブリッジ大学モードリン・コレッジ講師。18世紀前半の文人政治家ヘンリー・シンジョン（初代ボリングブルック子爵）の膨大な未刊行書簡を編纂した五巻本の大著を、英国の大手出版社Pickering and Chattoから近く刊行する予定。私生活ではフォークロックとLPレコードと水泳をこよなく愛し、休日には友人に手製のアップルパイやルバーブパイをふるまう永遠の好青年です。（武田記）

80年代ロックグループ、ザ・キュアーのフロントマン、ロバート・スミスは、「政治かぶれのミュージシャンなんてぼくの肌に合わない」と発言し、音楽と政治を切り離してきた。その彼が、最近イングランドで起きた暴動にはコメントしなければと感じたという。どうしてだろうか？　ロンドンで警官が29歳の黒人男性マーク・ダガンを射殺したのをきっかけに勃発した一連の暴動について、普段は寡黙で政治色のないミュージシャンが声を発しようと思った理由はなんだろうか？　2011年8月のできごとを80年代初頭の炭鉱夫のストライキと比べたスミスは、この夏にバーミンガム、リバプール、マンチェスターで起きた放火と略奪は妙に非政治的で、暴徒は「ただ物を盗むためだけに店を壊し、侵入している」と指摘した。政治的なメッセージのない暴力の勃発を前にして、それまで政治を避けてきた彼は、だからこそ余計に異様なものを感じたのかもしれない。

「自然は真空を嫌う」とアリストテレスは言った。ところがフードで顔を隠し、携帯電話やスポーツ用品を略奪するティーンエイジャーの姿を見ても、自分の違反行為の意味を分かってほしいという訴えが感じられず、この現象の抱える真空あるいは空虚は一向に埋まらない。『ガーディアン』紙によると、「一連の暴動のあいだ、フードを被った連中はイギリスのどこにでもいた」という。1970年代に自由を求め、本当の自分を表現するために服を燃やした女性解放運動の闘士とは異なり、今回の暴徒の多くはフードつきジャケットを着てあえて身元を隠し、機会があれば短絡的に物を奪った。あの暴動のあいだ目立ったのは、政治的な要求ではなく万引きや押し込み強盗だった。おかげで事態を深読みするコメンテーターも登場した。地方自治体の長や学者がテレビやラジオに引っ張り出され、なにが起きているのか説明を求められたが、沸騰する「時代精神（ツアイトガイスト）」を捉えようとして絞り出された彼らのコメントは、いかにもあと知恵めいていて、説得力に欠けていた。イングランドの政治思想の伝統から暴動を説明しようとした大学教授もいたが、これも的を外していた。

だがしかし、負傷して路上に座りこんだマレーシア人の若者に近づいた暴徒の一人が、救いを差し伸べるかと思いきや、ただ物を盗んで去った映像は（『デイリー・メール』紙、8月10日）、イングランド社会に開いた深い穴を見せつけてくれた。世話を放棄（ネグレクト）され、見すごされてきた人たちによる、確固としたモラルを欠き、生命や財産の貴重さにも、個人や市民としての責任にも無感覚な共同体の存在を。明確な動機を欠いた一連の暴動が覆い隠しているのは、ここに現実的な政治問題が、それも現代のイギリスがまともに摑めていない政治問題が露呈したという事実にほかならない。若者たちは――暴徒の大部分は18から20歳だった――機会と教育の不足をあばいているのだ。

外国のメディアはイギリス社会の腐敗を指摘している。デイヴィッド・キャメロン首相が暴動を「単純きわまりない犯罪行為」と形容したのに対し、ドイツの『シュピーゲル』誌の記事では、彼の見解が「あまりに単純で、この圧倒的な暴力の背後にあるものから注意を逸らすものだ。それはイギリスのエリート層へのフラストレーションである」との批判が紹介されている。もっとも、『エコノミスト』誌によると、海外での反応もさまざまだ。フランスの専門家が「ヨーロッパ特有の、救いようのない白人下層階級」についてもっともらしく語るかと思えば（実際には暴徒には多様な民族がいたのだが）、中国のコメンテーターは「管理なきコミュニケーションの危険」をしきりに糾弾する。イランに至っては、ご親切にも「警察による統制を強化するための人権監視員」の派遣を提案してきたという。真相と重なる部分もあるものの、こういった一般化は、イギリスの姿を正確に伝えるのに劣らず、それぞれの国内の政治課題を反映しているように思われる。

全体を見据える視点を忘れてはいけない。外国の新聞の読者のなかには、イギリス全土が炎上し、廃墟と化したと思った人もいただろう。しかしあれはこの国の各所で散発的に起きた事件であり、イギリス文化の全体を代表するものと見なすのには慎重になるべきだ。目を射るテレビ映像が世界中に発信され、何度も繰り返し流れたせいで、実際以上に暴動が頻発しているように思われてしまった。もっとも、ツイッターやフェイスブックのような新しい形態のメディアや、ネット上のチャットルームの一部は、実際に「破壊に熱中する巨大な暴徒の活動」を助長したという（『デイリー・メール』紙）。

機会さえあれば経費の申請でズルをやらかす政治家たちに、道徳上の模範として国民を指導する資格などない、と非難を浴びせたコメンテーターは間違ってはいない。しかし、責任を伴わずに権利を語ることもできないだろう。イギリスで次の総選挙が行われるとき、持たざる者たちは選択する権利を行使し、この真空をより意味のあるなにかで埋めてくれるかもしれない。あの暴動が有益な触媒として働き、重要な問題を議論するきっかけとなってくれるかもしれないのだ。とはいえ、あの現象そのものに政治的な主張を読むのは難しい。現実の政治的、社会的な課題に光を当ててはくれたが、一般化を許そうとはしないからだ。

※国際SILのデータベース「エスノローグ Ethnologue」ウェブ版（16版、2009年）による全世界で現在話されている言語の数。

この連載では、毎号、執筆者が変わり、世界の言語と文学を紹介していきます。

日直から。

今号の日直
朝吹真理子

Asabuki Moriko
84年生。著書に『流跡』『きことわ』。

さよなら ひさしいさよならを

WBをごらんのみなさま、はじめまして。日直の朝吹真理子です。

このフリーペーパーは、実家から徒歩一分のカフェにも置いてあるので、一服中、暇で手に取っている方もいらっしゃるだろうと想像します。

じつはこの原稿は、iPhoneによって書きはじめられています。京都の丸太町通りの喫茶店で打っているのです。ロールケーキとコーヒーをさきほど食しました。

うまれてはじめて参加したデモのことを書くので、パソコンのWordをひらいたり、原稿用紙にむかったりするよりも、もう少しパーソナルな装置でもって、そっと書いて差し送りたいと思ったからです。

もう一ヶ月ほど経ちましたが、2011年9月19日に東京の明治公園で開催された「さようなら原発　5万人集会」に参加しました。

WBの編集者であり、誌面にも黄色い帽子をかぶって登場しているKさんといっしょに参加したのです。

たくさんのひとが一堂に会する場所には不慣れですし、足が遅くまた握力も9しかないわたしは、砂川闘争のように激烈な運動に発展したらどうしようかと、いささか緊張して出かけたのでした。

はじめてのデモを終えた後、疲労はしましたが参加してよかったと思いました。充実感や希望を持った、というような、わかりやすい実感は得なかったのですが、だからこそ、まだるい足を揉みながら、素朴に参加して良かったと思ったのでした。

デモへの参加は「書く」ためのものではなかったので、このコラムを書くことに、少しとまどいがあります。一市民として参加したことを、この場で書くことに、少し緊張をしているのかもしれません。

もちろん、わたしは、地球という惑星には人工の原子力エネルギーはいらないと考えています。人類が自滅をする意志をもたないのであれば、です。

まずは、日本にある全54基の原子炉の活動を、永久に停止してほしいと望んでいます。

当日、最寄り駅の国立競技場を降りると、エスカレーターも階段も大混雑。ごった返していました。駅のお手洗いは長蛇の列で、外に出てからも、明治公園までなかなかたどり着けませんでした。

リュックサックにスニーカー、サファリ風の帽子、手製プラカード、リストバンドやてぬぐい、小型扇風機まで持参しているデモ慣れしているひともいれば、おそらくはじめてのデモ参加で表情がこわばっている5センチヒールの靴を履いた（！）女性ふたり組もいました。

とりどりの色やレタリングののぼりばたがたっていて、戦国時代の合戦みたいだと話しながら、集会場まで人波をかきわけて進んでゆきました。

「6万人いる」という声もききました。

明治公園のなかに入るまで30分ほどかかり、残念ながら、代表スピーチは終わりかけていて、聞くことができませんでした。（YouTubeなどに当日の様子はUPされています。）

思いのほか人数が多いことと、厳しい交通整理によって、わたしたちの居た場所は、予定から一時間以上経ってもデモ行進をはじめることができませんでした。はじまるまでの待機時間が辛く、苛立ちを伴うものでした。情報が少なく、現状を知ることができないまま待っていました。身軽な装備であったわたしたちは、前方に移動をして、動き始めているところに参入しました。わたしもKさんも、ともにプラカードを持っていなかったので、歩いているときは、配布されたパンフレットをひろげていました。集会場内では、「原発はいらない」と二色刷されたプラカードもほしいひとにむけて配布されていました。

デモのルートは、明治公園から渋谷のNHK付近まで、およそ3.9キロを歩きました。蒸し暑い午後だったので、喉が渇いていたわたしたちは、途中、外苑前あたりでスターバックスに入りました。

カウンターから外のデモ行進をながめていると、それが阿波踊りの連にもみえました。桴（ばち）を持って太鼓を叩く僧侶の団体、釜ヶ崎の団体、サウンドデモをするNPO法人、個人で参加したひとびと、シュプレヒコールに慣れていないひとびとが圧倒的に多かったのも居心地の良さに繋がっていた気がします。物々しいというよりは暢気（のんき）で、めいめい歩いているという足取りであったことがおもしろかったです。拡声器をつかって声をあげるひともいれば、自転車を引きながらぼーっと歩いているひと、歓談しながらプラカードをかかげているひと、さまざまでした。行進中、「原発はいらない」とプラカードを掲げてタクシーから身を乗り出した大江健三郎さんが過ぎ去るのも目撃し、同行人のKさんとしきりと興奮していました。

穏やかな行進でしたが、おどろおどろしいプラカードや、拡声器で激昂の声をあげるひとびとがいたのもたしかです。東電のキャラクターである、ポニーテールすがたの「でんこちゃん」の目に黒線をひいたり、どくろマークをつけたプラカードをかかげているひともいました。それはユーモアのある表現行為とはちょっと違うだろうとわたし自身は感じています。彼彼女たちの心からの声を否定する気持ちはまったくありません。愚かな電力会社に対しての怒りには心を寄り添います。ただ、その行為は、揶揄（やゆ）や中傷でしかないとも同時に思いました。デモは非難や罵倒（ばとう）をするところではなく、個人の意志を表明する場だと思います。

強い怒りや畏れ（おそ）をわたし自身感じてはいるのですけれど、その感情を吐露する場にデモ集会をしてしまうと、道行くひとの心には届かず、かえって「怖い」とシャットアウトされてしまうようにも思います。

個人としてそれぞれ生き、めいめいの考えがあって、原子力エネルギーに対して「さようなら」したい気持ちのみを同じにして集まっています。デモは、ばらばらな考えのひとたちが一時だけ集まる場所です。

今回のデモはベビーカーをひいた家族連れのすがたも多く、未来の子供のために、いまできることをしたいと立ちあがる父母の意志がみえました。参加しているひとびとの動機がそこにあったのも、このデモの特徴だとおもいます。

デモを歩道からみていたひとに、ほんとうに伝えたいことを届ける前に、デモって「怖い」という感情をもたせただけで終わってしまうことになるのは気がかりです。「怖い」という生理的な感情のみでは、未来を生きる子供のことを「考える」ことができなくなります。

わたしは「怒り」や「畏れ」の感情だけで、むやみに繋がり合おうとすることにも懐疑的です。ことばの力で、感情を揺さぶることは存外簡単にできます。それは軍国教育のしてきたことと同質になるように思います。平和教育も感情に訴えかけるかたちが多く、軍国教育の裏返しにもみえることがしばしばあります。

感情を揺さぶるだけではないかたちで、ひとからひとへと伝わることはできないのかを考えます。感情だけではないかたちで、ひととひととのやりとりがデモを通じてなされることを願います。

わたしが「さようなら原発」のことばに親しみを感じたのは、「さようなら」には中傷がないからだと思います。

その「さようなら」に、わたしは、ジャック・ルーボーの詩の一節「さよなら ひさしいさよならを」をかさねて思い出しました。わたしはその言葉を繰り返しとなえ、一市民として、無理のない範囲でデモに参加してゆきたいと思います。

よりデモが自由で物々しい場所でなくなるには、デモはかくあるべき、という理念をもたないひとがふらっと参加して帰ることではないかなと思います。本を読みながら行進してもいいと思っています。遅刻早退も全然ありなのです。

真摯に書くことは空腹を呼び起こします。

ミントティーを頼んだので、それにあうケーキをもうひとつ食べようかなともくろみつつお終いにします。

読んでくださってありがとうございます。

この連載では、毎号、執筆者が変わり、さまざまな話題をとりあげます。

Photo by e_covi（小林英治）
右のURLで、この写真のカラー版が見られます。http://instagr.am/p/NhYSI/

こども WB

WASEDA bungaku
vol.024_ 2011_fall

FreePaper

土 SATURDAY

5

10 愉しい文学
Wonderful BUNGAKU

11 温泉

12

17

18 クセブン しめきり
旅行記①

19

24 旅行記②
論文 読み

25

26

①	HR	朝吹真理子
1	外語	エイドリアン・ラッシュモアニディヴィス
2	生物	八代嘉美
3	算数	田城塔
4	体育	青木淳悟
4	給食	望月旬々
5	冒険	米光一成 + ナカシマカズユキ
絵	図書	カーリル

月 — 可燃
水 — 資源
金 — ペットボトル
第3 不燃

ヴィーナスたちの文明開化

開館日5月 午前10時 — 午後6時
(この日が好のんあちゃとまいる日)

待券

SPACE
ミュージック

佐倉

タッパー ミス 返す ビズ

西の市きめる

・早起きする!!
・走る(週2で)
・腹筋
・ウォーキング
・YOGA

運動をする!!

¥0

今日マチ子